

惜歳暮

1330 今更におしむ心のいかなれやあたにくらせる年のなこりを
1331 月も日も身のいたつらにすくしきて暮行年を何おしむらん

「
(ウ)

歳暮近

1332 行年もひとよふたよの小さ、原霜より下に春やまつらむ
1333 見る影もあはれ程なしひと、せのなこり今はの有あけの月

句題三十首哥中に 年華忽已晚

1334 花紅葉見しは昨日の夢かともくれ行年にけふそおとろく

歳暮雪

1335 くれてゆく年の色とや松杉の葉かへぬ陰もうつむしら雪

花月雪三十首哥よみける中に

1336 あか[・]秋の[・]花と月と比[・]年[・]くれ[・]て[・]ゆ[・]も[・]な[・]ま[・]り[・]や[・]雪[・]に[・]ち[・]ら[・]み[・]ん

山歳暮

1377 時わかぬ^まつ^の緑^もの山^もしら雪^のつ^もれる色^に年^そくれ^ゆく

韻歌百首の中に

1338 と、めあへぬ年のなこりよ月も日もひま行駒の足からの関

都鄙歳暮

1339 いとなみの品こそかはれ行年をおしむや同じひなもみやこも

歳暮祝

1340 草も木も花に匂へる雪の中はけにとよ年のくれそにきはふ

あるしとありてこもりける年の暮に、雪のふりける時
しはすつしよの田はよめる

1341

冬こもるむくらの門もあす[・]よ[・]りの[・]春[・]を[・]か[・]こ[・]と[・]に[・]雪[・]や[・]は[・]ら[・]は[・]し

除夜 百首哥よみける中に

1342 ゆく年もあくれば春とゆふつけの夜深き声や別なるらむ

「
(ウ)

(一九九六年一月十六日 受理)

「
(97・オ)

1304 椎柴のつれなき中にをく霜のしゐては何を思ひ染らん

爐火

1305 雪深き軒端の梅も埋み火のあたりの春にまつ匂はなん

爐火似春

1306 ちる雪も花とや見まし埋火のあたりのとけき春の心に

咲初る軒端の梅も匂ひきていと、春なるうつみ火のもと

寒夜爐火

1308 ふけぬるかあたりの春も霜雪のよさむにかへる閨のうつみ火

爐辺閑談

1309 花鳥の春をかたらふのとけさにけふりも霞むうつみ火のもと

あすは又こゝろにうつめうつみ火のかきあらはせるうき世語りも

向埋火

1311 月雪の光にむかふこゝろさへよさむにかはる埋火の本

神楽

1312 神垣の霜のしらゆふ世さかけてかれぬためしや榊葉の声

星うたふ庭火の前にをく霜のとくるや神のこゝろなるらん

仏名

1314 となふなる三世の仏のひかりもてきえ行つみは露も残らし

歳中鶯 飛鳥井卿月次御題の中

1315 梅かえの花や遅きとふる年の雪より匂ふ鶯のこゑ

1316 とけそむる声や雪間の春ならんまた年深き谷のうくひす

1317 歳中梅 同

冬こもる雪のうもれ木いはやも春に先たつ梅のはつ花

早梅

鶯もはつねをいそげ梅かゝの春待あへすにほふこすゑに

早梅薫風

1318 飛鳥井卿月次御題の中

1319 難波津の風こそ匂へ雪の中に冬こもりつゝさくや此花

梅の花春の隣に咲出てあらしもかほる雪の中垣

冬木といふ事を

1320 梅の花咲そふ雪の中垣に春もとなりと風かほるなり

春漸近 游江亭御当座

1321 花にさく春やまちかき芦垣のよしの、さくら冬こもりても

歳暮

1322 ゆく年やひとよくへたつらん春に間近き庭のさ、かき

1323 つもりこしうき身のとかの怠りもおとろかれぬる年のくれかな

1324 よしさらは春を待てやなくさめんおしむにとまる年の暮かは

余所にのみはかなく暮てゆく年の月日よいかて身につもるらん

1325 年のくれぬる 飛鳥井卿月次御題三十首の中

1326 月も日も流れてはやき川浪の立もかへらて年のくれぬる

1327 ゆく水はこほりはて、も冬川のよとむともなく年の暮ぬる

1328 なへて世におしむは深きなこりともしらてやあたにとしのくれぬる

(95・オ)

(96・オ)

- 1280 朝日さす岡辺の松の梢より夜半のなこりと落る白雪
- 1281 柳の枝に雪のつもれるを見て
冬かれの柳の小枝打なひきみたれてみかく雪のしら糸
- 1282 閑居雪 百首哥中に
人とはぬ逢か宿の庭の雪たかならはしに跡もいとはん
- 1283 庭雪
けふいくかふりぬる宿の軒端さへひとつにつく庭のしら雪
伊勢太神宮に五十首哥奉りける時 同し心を
- 1284 日にそひてふみ分かたき庭の雪ふらはといひし人もまたれす
庭雪厭人
- 1285 いか、せんふるは友まつ雪ながら跡つく庭はとはる、もおし
雪のいさ、かふりつもりけるあした 或人の許に申遣しける
- 1286 いたつらにとはてきえなは庭の雪跡つくよりもおしからぬかは
窓雪
- 1287 今さらに何かあつめん怠りの身に光なきまとのしらゆき
鷹狩
- 1288 分まよふたもとや寒きかり衣ひもゆふこりの霜の落草
- 1289 冬草のはかなき陰やたのむらん狩場の鳥のかくれ兼ては
鷹狩日暮
- 1290 たか人のいる野の嵐身にして猶かりくらす袖の月かけ
帰るさをかた野の月に契りてや鳥立もわかす狩くらすらん
- (94・オ)

- 1292 野鷹狩
たか人の袖たにたへぬみかりの、ふ、きに鳥のたつ空やなき
- 1293 炭竈
みねいくへかさなる奥にすみやきの烟の末を見るもさひしき
わひてたくしつかなきの程見えて烟もほそきみねの炭かま
- 1294 雪中炭竈
雪深き木々にはたえて炭かまのけふりになひく小野の山かせ
吹さそふ雪のふ、きに一村の烟も白きすみかまのやま
- 1296 飛鳥井卿句題三十首の中に 雪のまにくと云事を
ふりうつむ雪のまにくと炭かまの烟そたてる小野の山もと
- 1297 炭竈烟 亥刻より丑刻五十首哥の中に
月にうきならひもしらし炭やきのくれ行みねにたつるけふりは
- 1298 薪
山もとのけふり立そふ雪の中につか爪木もさそつもるらん
おる袖の嵐もさむし山人のわくるにたへぬ雪の下柴
- 1299 雪深き山の下柴打はらひかれなて賤のつま木こるらし
冬哥の中に
- 1300 山人のかしらの雪に年くれて身にもなけきの数やつむらん
椎柴 百首哥中に
- 1301 秋の色は跡なくさそふこからしに残るもさむきみねの椎柴
椎柴霜
- 1303
- (ウ)

- 1256 湖雪 雪十首哥の中に
志賀の浦や氷れは遠き汀より音せてよする雪のしら波
- 1257 汀よりつもるも遠ししかの浦や氷の上の雪のしら浪
海辺雪
- 1258 海遠くふりくる雪もよる浪の色にそさはく磯の松かせ
浦雪
- 1259 三熊野の浦風寒み浜ゆふのいくへか雪のふりかさぬらん
花月雪三十首哥中に
- 1260 もしほくむ浦のかよひ路たえぬらし日をふる雪によはる烟は」
ふりすきてはる、けさの浪路に浦雪は一村の雪を残してわたる浦舟
(92・オ)
- 1261 島雪
- 1262 浦風のはらひもあへぬ雪の中にむらく青き浮島の松
韻歌百首よみける中に
- 1263 ふりつもる浜松かえの雪の色にみたれてつ、く沖津白浪
旅泊雪
- 1264 浪の上もあくるよいそく梶枕笥のひまもる雪のひかりに
友をとふすさひならでもとまり舟夜深き雪にこきいて、見ん
古寺雪
- 1265 初瀬山かねのひ、きはくれ初果猶さやかなるみねのしら雪
山家雪
- 1267 払ひこし松の嵐はうつもれて雪にちりなき山陰の庭
- 1268 しはしこそ跡をもいとへさひしさの余り日をふる雪の山里
花月雪三十首哥の中に
(ウ)
- 1269 山里は人目も草もしら雪の日をふるにこそ枯まさりけれ
都人ちきる山路のひと筋はうつみなはてそ雪のした庵
樵路雪 百首哥の中
- 1270 分なれし岩根の松のしるへさへ跡なき雪にまよふ山果ひと
雪のまにく 飛鳥井卿句題三十首の中
- 1271 日数ふる雪のまにく柴人のしるて世わたる道やくるしき
雪埋苔徑
- 1272 むす苔の霜にはもれし緑さへあとなくうつむ雪の山みち
竹雪
- 1273 むら雀ねくらや寒き呉竹のよ深き雪に声もさはきて
雪のいたく積りける日 竹の下道を分すくるとて
- 1274 打払ふ後こそつもれ呉竹のおほふはふかき雪の下道
松雪
- 1275 吹払ふ風のちからもよはりきて雪にはたへぬ松の下おれ
をく霜につれなく見えし山松もうもる、果や雪のした折
色かはる世りの行ことわりと松のはのもみちぬ山もつうつむるしら雪
松上雪
- 1276 十回の花にほひて松か枝の千世の緑をうつむ白ゆき
句題三十首哥中に 晴雪落長松
- 1277 十回の花にほひて松か枝の千世の緑をうつむ白ゆき
- 1278 十回の花にほひて松か枝の千世の緑をうつむ白ゆき
- 1279 十回の花にほひて松か枝の千世の緑をうつむ白ゆき

- 1242 1241 1240 1239 1238 1237 1236 1235 1234 1233 1232 1231
- 積雪深
ふみわけん程こそ人もまたれけれつもるやいくへ庭の白雪
- 浅雪
真砂地はつもりもあへす風さえて落葉の霜に氷る薄雪
- 韻哥百首の中に
しら雪の積るも浅し庭の面は落葉に秋の色を残して
- 月照雪
よひのまにつもるも浅き庭の雪色をふかめてはる、月影
- 冬哥中に
霞む夜に花ちる春のおも影も雪に立そふ薄雲の月
- 雪散風
ふるも猶氷らぬ程は吹たて、あまきる雪にさはく山かせ
- 雪似浪 飛鳥井卿月次御題の中
打よする浪かあらぬか塩かせの吹上の浜にふれるしら雪
- しら糸はこほる岩ほにふる雪のみたる、浪や音なしの瀧
- 雪似雲 同
夕時雨はれ行みねに一村の雲を残してつもる白ゆき
- 山雪
明わたる遠のたかねにしら雲のはれぬよそめや初雪の空
- 奥深くうつむやいくへしら雪に山は青葉の名のみ残りて
かり衣すそ野をかけてはしたかのと山をしなみふれる白雪

- 1255 1254 1253 1252 1251 1250 1249 1248 1247 1246 1245 1244 1243
- (1243)
夜の雨のふる郷寒き雲間より雪にあけ行みよしの、山
- 雪満群山
常盤木のみとりやいつれしら雪の色にはもる、山のはもなし
- 遠山雪
夜の雨の遠山かつらほのくと雪にわかる、みねの横雲
- ふもとよりまつくれそめて白雪の光に残る遠の山のは
- 花月雪三十首哥中に
かるもかく跡も幾重か埋もれつ雪にふす猪の床の山陰
- 山路雪
さをしかの帰るやいつこしら雪のふかき山路は跡ものこらす
- み山路にたちしるへせし駒の跡もゆくくとえてつもるしら雪
- 野雪
かれ残る秋のかたみも跡たえて霜にかさなる野への白ゆき
- 橋雪
ふみ分るあおとも絶て深きよの雪を渡せる里の中橋
- よさの浦やふり晴て行浪の上に雪を渡せる天のはし立
- 関雪
鳥のねもあくるやいそく逢坂の関の戸しらむ雪の光に
- ふみわけてこゆれば積る雪の中に跡なき駒の足からの関
- 江雪
うつもる、入江の芦の下おれに雪わけかよふあまの釣舟
- 「ウ」

- 1205 つけにけりいさよふ浪も音さえてあしろにひをのよるの河風
月照網代
- 1206 小夜ふけてかゝりたきけつ山川のあしろに月やもりかはるらん
もり明す袖の夜寒やなくさめて網代の床を月のとふらむ
網代寒
- 1208 もる袖も霜をかさねてこほるよの月影さむし瀬さの網代木
霰
- 1209 一しきりあられみたれてふる郷のならの都に玉やしくらむ
ふもとにはきをふあられのあち山嶺の雪けやさえ増るらん
霰随風 百首哥中に
- 1211 いくたひかあられくたくる白玉の緒捨の山の風のたよりに
閨上霰
- 1212 ね屋の上に落るあられの玉かしは音もくたくる風のはけしさ
霰
(89・オ)
- 1213 袖の上にきゆるははらふ程もなしひち笠雨にまじるしら雪
雪
- 1214 雨そゝく軒端の松の深緑まされる雪の色はまかはす
雪
- 1215 花紅葉うつろひかはる一年のなこりも深き木々のしらゆき
はな紅葉さそひ馴にし山風はけさも木末の雪にいとほん
飛鳥風さそふ時雨の浮雲も雪になりゆくかつらきの山
初雪
- 1218 しくれにし雲のかへしの山風にさそはれそめて初雪そふる
とへかしと契りし人も今さらに跡おしまるゝはつゆきの庭
住吉社に十首哥奉りける時 同し心を
ふりそめてまつ跡おしむ庭の雪日数つもらは人を待つとも
暁雪
- 1220 よの程の時雨ははれて初雪のひかりにしらむ山のはのそら
朝雪
- 1222 よひのまにさやく霰の玉さゝも今朝はうもるゝ雪の下草
人はまたわけもかよはぬ朝明の大路しつかにつもるしら雪
雪のふりけるあした 藤原氏輔の許に申遣はしける
やかて又つもらは跡のいとほれんけさふる雪にとふ友もかな
冬のあしたによめる
- 1224 はつ雪のよるのなこりもかつきえて朝日におしき軒の玉水
雪朝 川畑篤実家当座
- 1226 跡おしむ程こそなけれけさのまの日影にむかふうす雪の庭
けさは又とはれん跡をいとふ哉ちきりし宿の庭のはつ雪
夜雪
- 1228 とふ友をまつよの月も影きえてふくるはおしき庭の白ゆき
連日雪
(90・オ)
- 1229 しはしこそつもる日数もかそへつれふるをならひの白雪の空
晴やらぬ日数も今はつもりきていやしきふれる庭のしら雪
- 1230

1181 なく声も遠くなる尾の浦千鳥戸渡る浪に月を残して

暁千鳥

1182 有明の月もふけるの浦さひて霜のしらすにちとりなく也

夜千鳥

1183 なく千鳥ねられぬ声もさえ増る月の霜夜の床の浦風

1184 梶まくら夜やふけぬらん湊川川音さむみ千鳥なくなり

川千鳥

1185 夜深くもなくや千鳥の思ひ川浪のうきせに妻したふこゑ

1186 たかせ舟さすや川との夕霧に行ゑもしらすたつ千鳥哉

名所五十首哥の中に 清河原

1187 月かけの清き河原の河風に夜やさむからし千鳥なく也

湖上千鳥

1188 村千鳥声そ満くる志賀の浦の浪は水りて遠さかる夜に

浦千鳥

1189 浦つたふ行ゑやいつこ夕千鳥けふりの波にほのかなる声

1190 関守も寐覚の月に物や思ふ千鳥しはなくすまの浦風

伊勢太神宮に五十首哥奉りける時 浜千鳥

1191 塩風のあらし浜への夕千鳥伊勢島遠く声しきるなり

水鳥

1192 池にすむ月の氷も夜や寒き床やすからぬ水鳥のこゑ

月前水鳥

1193 つはさにもまなくやこほる水鳥のはらへはかゝる浪の月かけ

寒夜水鳥

1194 月にたつ羽音もさむし水鳥のねぬ夜の床や猶氷るらん

1195 小夜ふけて猶むすふらん水鳥の上毛の霜も床のこほりも

江水鳥 百首哥中に

1196 まの、江のうつらの床は冬かれて芦間に残る水鳥の声

冬哥の中に

1197 芦たつも声をかはして湊江□月の霜夜にさはくみつ鳥

1198 池水の鳩のかよひ路とちはて、月やこほりの下くゝるらん

鴛 飛鳥井卿月次御題の中

1199 つらゝゐる涙の川の夜半の床うきねの鴛や独なくらん

川鴛

1200 ともねせしよるの河浪立わかれ明るなりやをしの鳴らむ

鴨 飛鳥井卿月次御題の中

1201 冬枯の夜床やさむき芦鴨のをか青羽も霜をかさねて

1202 霜かれし汀の草のねにたて、よさむやわふる池の芦鴨

残雁

1203 秋霧の立をくれにし鴈かねや雪けの空を分てきつらん

田残雁

1204 霜かる、冬田沢の芦のよを寒みころもかりかねうらみてや鳴

網代 百首哥の中に

「(ウ)

「(88・オ)

- 1157 浦寒兼
 みる田鶴のかすもかくれすわか
 の浦の芦へあらはに霜かる、比
- 1158 水
 山川の浪のしからみかけそへぬ
 落葉か上にむすふこほりは
- 1159 氷初結
 やとりこし月の光をその俣にこほり
 そめたる夜半の池水
- 1160 さらてしも木葉によとむ山陰の石間
 の水やまつ氷るらん
 句題三十首哥の中に 山寒水欲氷
- 1161 日影なきみ谷の嵐さえくれてこほり
 をいそく山の下水
 飛鳥井卿句題三十首の中に 冬そさひしさ
- 1162 谷水の音もこほりて山かけは冬そさ
 ひしさ深く成行
 氷留水流
- 1163 逢坂や山下水のかよひちもよるは
 水のせきと、むらむ
 流れあへぬ落葉もいくへとちそひて
 紅み深く氷る山水
 伊勢太神宮に五十首哥奉りける時 池水
- 1165 すむ月の影をおもかけなから残してさ、波の跡なく氷るけさの池水
 瀧水
- 1166 岩かねの浪のしら糸むすほ、れ水を
 さらす布引の瀧
 江水
- 1167 しほれふす入江の芦のしからみに猶
 せきとめて氷る浦浪
 冬月
- 1168 軒端なる木葉あらはに冬かれて風を
 光にさゆる月かけ
 1169 晴くもる光もいと、さえ増る雪けの
 雲の中空の月
 置かはる露より霜にやとりきて庭に
 よかれぬ浅ちふの月
 冬月冴
- 1170 霜にさえ雪にみかきて冬のよの月や
 いかなる光そふらむ
 寒月
- 1171 ふけて猶やとるも寒き光かな月より
 袖の霜やをくらん
 霜氷むすはぬ袖の上にたにさゆるは
 月の光なりけり
 深夜冬月
- 1172 霜白き庭の落葉に影さえてあらしの
 後の月そ夜深き
 山冬月 月次三首哥の中
- 1173 こからしのはらふ光やくもるらん
 落葉しくる、山のはの月
 散はてし木葉の霜の跡とめて月そ氷
 れる冬枯の山
 河冬月
- 1174 さえわたる氷の上もすむ月の光にみ
 かく玉河の水
 野寒月
- 1175 霜さゆる枯野の原の浅茅生にひかり
 も氷る夜半の月影
 寒閨月
- 1176 とけてねぬ霜夜の床のさむしろに
 重ねて氷る月の影哉
 千鳥
- 1177 とふ妻やつれなかるらん浦千鳥ね
 ぬよの月の有明の浜

「
 (86・オ)

「
 (ウ)

「
 (ウ)

1131 呉竹の葉分の日影ほの見えてむら／＼こぼるまとの朝霜
 1132 むらす、め日かけやいそく呉竹のねくからもさゆる霜の朝けに
 1133 かねの音も夜深くさえし程見えて朝霜しろき小初瀬の山
 夜霜
 1134 深き夜の霜のさむしろふしわひて結はぬ夢を月そこと、ふ
 をく初霜を 飛鳥井卿句題三十首の中
 1135 さゆるよの月の光やまさこ地にをく初霜を猶かさぬらむ
 よさむなる芦への鶴の毛衣にをく初霜をうらみてやなく
 樵路霜 百首哥中に
 1137 さをしかのかよへる外に跡もなしました朝霜の深き山路は
 野霜
 1138 本かしはもとの緑の色もなしふるから小野の霜枯のころ
 庭上霜
 1139 ふくるよの軒のこからし音たえて庭の落葉に霜さやく也
 竹霜
 1140 葉かへせぬ緑もけさはしろたへの霜を色なる庭のむら竹
 残菊
 1141 霜の後かれせぬ松の下陰に千世やちきりて残るしらすく
 置迷ふ霜の花さへ色そひて冬かれしらぬ庭の白菊
 月照残菊
 1143 月影の匂ふも寒ししら菊の霜かれ残る花のひかりに
 「
 (ウ)

1144 対残菊待寒月 飛鳥井卿月次御題の中
 1145 かれ残るまかきの霜のしら菊も花の色そふ月をまつらん
 待出る月も寒けしませの内に残るも霜のしら菊の花
 寒草
 1146 うき秋の風のやとりは枯はて、ゆふ霜さやく庭の萩はら
 冬哥の中に
 1147 冬枯のはてはあたる思ひ草霜より下に春やまつらむ
 寒草霜 百首哥中に
 1148 枯ふしてはらひもあへぬ冬草の袂をせはみ霜やをくらん
 枯野
 (1149 萩か花路なき野への霜枯に鹿の恨や猶残るらん)
 1150 さま／＼の花の色香も虫のねもひとつにうつる野への霜枯
 露深き秋のなごりのうらみさへかれ葉によはる野への葛原
 1151 むさしのや秋のゆかりの色□なし草はみなから霜にしほれて」
 1152 かれ行小野の 飛鳥井卿句題三十首の中
 1153 しの原のしのふにあまる秋なれや霜にかれ行をの、浅ちふ
 1154 さく花に匂へる秋の色もなしかれゆく小野の霜の下草
 枯野霜
 1155 も、草の花の色香も今はた、かれ野の霜に残る面かけ
 江寒兼 百首哥中に
 1156 水鳥の入江の床やかはるらんかれ行芦のひとよ／＼に
 「
 (85・オ)

- 1108 落葉混雨 百首歌の中に
 今はとてちるをもさそふ時雨哉をのれ染ぬる木さのみち葉
- 1109 葉落月明
 ひまもなくしくるとき、し軒端より落葉にはる、よはの月影
- 1110 夜落葉
 浮雲ははれ行月の下風に時雨をのこす軒のみち葉
- 1111 小夜時雨はれ行跡の軒端よりくもらぬ月にふる木葉哉
 韻哥百首の中に
- 1112 夢さそふ軒の木葉の音さえてぬれぬ枕に時雨をそきく
 杜落葉
- 1113 風さそふよその紅葉の時雨きて色に出らん杜のときは木
 橋落葉
- 1114 苔の色もちる紅葉さにつもれて錦をわたす谷のかけはし
 川落葉
- 1115 紅みの淵やせくらん山川の浅瀬の浪につもる木葉は
- 1116 冬を浅みこほらぬせ、の川水も落葉にせける風のしからみ
 瀧落葉
- 1117 しら糸もちる紅葉さのたてぬきにあやおりかくる山の瀧つ瀬
 庭落葉
- 1118 払ふかと思れはよそなる木葉まで跡なき庭にさそふ山風
 木枯
- 1119 散つくす枝にはたえてこからしの音も落葉の庭にさひしき
- 1120 落葉せし庭の梢は吹すて、外山の松に残るこからし
 夜木枯
- 1121 軒端なる木葉あらはにはる、よの月にしくる、凧のこゑ
 冬林といふ事を
- 1122 今はた、紅葉をたきし跡ふりて林に残るこからしの声
 寒松
- 1123 散はてし紅葉の跡の木枯に軒端の松そひとりしくる、
 冬松 飛鳥井卿月次御題の中
- 1124 あたにちるよその紅葉の霜枯に松の千年もあらはれにけり
 年寒き松のみさほもあらはれつもろき木葉の冬枯の山
 冬朝松
- 1125 朝日さす上葉の霜やとけぬらん緑にかへる岡の辺の松
 霜
- 1126 色そへし花野の露のいつよりか枯葉の霜と置かはらん
 とけてぬ夜寒の霜そ氷りける露には馴し片敷の袖
- 1127 曙霜
- 1128 さえしよの月はまさこに影きえてはつ霜白しあけほの、庭
 曙霜
- 1129 くれ竹の葉風もたえてをく霜の色よりしらむ窓のあけ□
 朝霜
- 1130 百首歌の中に

すさひ草 卷之四

冬之部

初冬

1084 ゆく秋は跡なき夢の小夜枕あらしのこゑや冬を告らん

1085 そめくし秋はきのふの紅葉さもけふより冬の色にしくる、

1086 いつしかと霜の下草枯そめて垣ほあらはに冬はきにけり

初冬朝

1087 夕こりの昨日の秋の嶺の雲けさは冬とや打しくるらん

初冬風

1088 秋の声おとろきそめし萩のはに冬たつけさの風か□るなり

1089 秋風のやとり馴にし萩の葉もけさ吹からし冬は来にけり

初冬時雨 林館御当座

1090 雲かゝる岩田の小野の初時雨山路こえてや冬のきぬらん

伊勢太神宮に五十首哥奉りける時 同し心を

1091 ふる方も定めぬ空の初時雨けさたか里に冬をつくらん

時雨

1092 浮雲のうきてた、よふ村時雨世にふる程もさためなき空

1093 ふりすくる寐覚の空の小夜時雨又たかりの夢さそふらん

1094 くもるかと思はれははれ行さよ時雨軒の零に月をのこして

しくれ 飛鳥井卿月次御題の中

1095 晴くもり月も定めぬ光哉しくれてふくる浮雲のそら

1096 浮雲の方も定めすさそひ行風や時雨の心なるらん

韻歌百首の中に

1097 秋の色は残さぬ木々の山風に時雨を送るみねの浮雲

暁時雨

1098 わきて猶袖ぬらせとやしくるらん物思ふ比の夜半の寐覚に」(ウ)

夜時雨

1099 長き夜にあかて時雨のいくたひか見はてぬ夢の枕とふらん

1100 ふうくるよのねさめはよそにとひ捨て月にしくる、山端のそら

名所五十首哥の中に 荒乳山

1101 ふう風にふもとの浅茅打なひき音もあらちのやますしくる、

遠郷時雨

1102 住の江の松よりはる、浮雲や遠里小野に又しくるらん

(此詠殊□候)

1103 うき雲に烟立そふ山もとの里の朝けや猶しくるらむ

冬哥の中に

1104 散まかふこのはをそへて紅みの色にしくる、みねの松かせ

落葉

1105 山風もさそひ残さぬ木のもとにちるをさかりとつもる紅葉さ

1106 うき秋のあらしの声や夕暮の庭の落葉に猶残るらん」(82・オ)

落葉風

1107 吹たて、又や木末にかへすらん庭の落葉にさばく山かせ

1068 言のはも色そふえたの紅ゐに恵の露のふかきをそしる

北郷久敬君の御許に 山路の紅葉の一枝を奉りけるに

折こしは色浅からぬ心さし深く染たる枝のみち葉

とよみてたまはりしかは かくよみて奉りける

1069 浅からぬ詞の露にひとえたの紅葉も深き色はそひけれ

柞の紅葉を 白尾何某にそへてつかはしける

1070 ひと枝のは、その紅葉うすけれと心の色は深きとも見よ

山路秋過

1071 紅葉さのちりかひくもる山路にもまよはぬ秋やくれて行らん

暮秋

1072 なこりなく木さのこのはもさそはれて風の末に秋そくれ行

木さの色もとまらぬ軒の山風に秋のなこりや有明の月

秋梢暮

1074 うらかる、秋の末野の露霜にかけもさひゆくありあけの月

独惜暮秋

1075 さのみなと千さの思ひにおしむらん我身ひとつの秋の暮かは

花月五十首哥の中に 暮秋暁月

1076 行秋の別程なき横雲にいつるもおしき有明の月

暮秋虫

1077 鳴よはる秋の末葉の虫のねに浅茅か月もかけそふけ行

暮秋聞鹿 飛鳥井卿月次御題の中

1078 月ほそき有明の山になく鹿の声にも残る秋そ少き

1079 行秋の末野の小萩うらかれて鹿もなこりのねにやなくらん

暮秋鐘

1080 ゆく秋の別をいそく声はうし月に待こし夕くれのかね

1081 このはちる嵐の末にきこゆなり秋もなこりのゆふ暮の鐘

鐘声送秋

1082 くれはつる秋の行ゑもそことなくさそふに似たる人相のこゑ

九月尽

1083 うき物となかめし秋もけふのみのなこりはおしき夕暮の空

「
(ウ)

「
(80・オ)

「
(ウ)

- 1046 秋深くくしくる、山のつたかつらくりかへしてや染千入つくすらん
 鳶
 紅葉
- 1047 乙女子も染るやいそくくれなぬの袖ふる山の秋のこの葉は
- 1048 なく鹿の涙も色に出ぬらし妻とふ山の秋のもみち葉
- 1049 秋哥の中に
 立田姫たへぬ思ひのなみたにや染しこのはも色にいつらむ
 新霜染楓樹
- 1050 山姫もちしほをいそけ初霜のまた染はてぬ木々の錦は
 秋哥の中に
- 1051 鹿なきて初霜寒し朝霧の立野のまゆみ色かはるらし
 紅葉漸紅
- 1052 時雨ゆく穴師の松原日にそひてましる木葉の色そ分る、
 紅葉処々
- 1053 露時雨そむる木葉のむらくに里わく秋の色を見すらむ
 紅葉盛
- 1054 染残す山のはもなし立田姫さらす千入の木々のにしきは
- 1055 露時雨染ものこさて嶺ふもと同じ紅葉の色やあらそふ
 夕紅葉
- 1056 霧深きふもとほくれてをくら山日かけに残るみねのもみち葉
 雨中紅葉
- 1057 下草も染残さしと紅葉のちしほの山や猶しくるらん
 山紅葉
- 1058 時雨ゆく雲より奥のいかならん外山の紅葉染まさる比
- 1059 染てけり山は千入のくれなぬに露も零もいろかはるまで
 河辺紅葉
- 1060 たつ田川うつるきしねの紅葉さや水にも秋の色をそむらむ
 岸紅葉
- 1061 影うつす水の錦も中たえてきし根の松にましるもみち葉
 松間紅葉
- 1062 秋の色はつれなき松のこのまより時雨にたへぬつたの紅葉々
 庭紅葉
- 1063 露霜の深き山辺よいかならん庭をさかりの秋のもみち葉
- 1064 たかねよりかつく染る秋の色もふもとにふかき庭の紅葉々
 紅葉帯菊 飛鳥井卿月次御題の中
- 1065 染つくす庭の木葉紅葉の下の紅にに秋をやあらそふ白菊の□
- 1066 さく花もくれなぬ匂ふ庭の菊染る木葉の色をうつして
 末川久命君の御許より ある山莊の紅葉の一枝なり
 とて 御短冊をそへられ
 一枝の千入の程を見せはやと手をる紅葉の家つとそれ
 といへる御歌をたまはりければ 御かへしとて奉りける
 手折こし色の千入の一枝にしらぬ山路の秋も見えけり

「ウ」

「(78・オ)」

- 1024 野分
百草の花にはおほふかひもなし野分にたへぬ庭の袖垣
長月初の比 風いとわき立て 田なつ物はたつもの、
たくひいみしうくたけそしぬる事を 人みな嘆きあへり
けるをきゝて
- 1025 露ならぬ心もけさの野分には民の草葉の上にくたくる
野分しけるあけのあしたに
- 1026 なひきふす葎も八重にとちそひて野分の跡の庭そさひしき
秋霜
- 1027 今よりの夜寒よいか草の戸のうら枯いそく秋のはつ霜
本ゆひのむすほ、れ行思ひ哉いそしに満る秋の初霜
秋哥の中に
- 1029 もすのなくをとろの末葉秋たけて寒き朝けの霜やをくらん
岡葛
- 1030 すむ里もあらはになりぬ露霜のをかへの真くつうらかる、比
葛風
- 1031 人とはぬ外面のまくつ音つれてうらさひしかる秋の夕風
あれはつる宿の垣ほのくつかつら風にうらみてくる人もなし
菊
- 1032 うらかる、草のまかきの初霜にをのれ色そふしら菊のはな
黄菊 飛鳥井卿月次御題の中
- 1034 えもいはぬ色に匂ひてしら露のひかりもかはる花の村菊
山吹のまかきは秋にうつろひておなし色なる菊のひと本
鹿兒島住吉奉納哥に 水辺菊
- 1035 淵となる露も落そふ下水に千世やせくらん白菊の花
浜菊
- 1036 もしほくむ袖に千年やうつすらん菊の香さそふ秋の浜風
よる浪の花もひとつに吹上のはま風にほふ秋のしらきく
籬菊
- 1037 あれはつる垣ほの松の下陰に千世やちきりて匂ふしら菊
菊の垣ねに 飛鳥井卿月題三十首の中
- 1039 花の色も霜かれしらぬしら菊の垣ねに千世の秋やこもれる
さく花の色を重ねて白妙の菊の垣根に深き朝霜
菊満庭
- 1040 三の径もはらはぬ花にうつもれてをのれとしける庭のしら菊
庭なる菊の花盛御覽せんとて
- 1041 公いらせ給ひて 御歌ともたまはりける時
しら菊の花も色そふまかきかな仰く言葉の露の光に
- 1042 或人の庭に手つからうへ置ける菊の花盛なるを見て
うつしうへてしめゆふま、に色も香も手にまかすらん庭の白菊
慈誠君前栽の菊の宴たまはりし時 よみて奉りける
- 1043 咲匂ふ花のしら露くみそへて千年もあかしきくのさかつき
黄菊

玉津島に十首哥奉りける時 擣寒衣

999 から衣ころも夜寒の月かけに霜をかさねて打あかすらし

擣衣何方

1000 たか里の秋のうらみか深き夜の嵐の末にころもうつこゑ

1001 うつ音も空にそまよふ秋風のさそひすてたるよそのきぬたは

擣衣幽

1002 夕月夜さすや岡辺の里遠み声もほのかに衣うつなり

1003 すむ里もあるかなきかの山もとにうつや碓のこゑもつゝかす

1004 さそひこし風のちからもたゆむらんふけて碓の遠さかるこゑ

擣衣闇風

1005 里遠さきぬたの音の定めなくさそふとすればよはる秋かせ

夜擣衣

1006 打しきるひゝきもさむし小夜衣霜をきまよふ月にうらみて

名所擣衣

1007 秋寒き月のあはれも深草の野となる里に衣うつこゑ

1008 あま衣よさむのまのゝ浦風に尾花が浪やかけてうつらん

韻歌百首の中に

1009 月にふく宇治の川風身にしみてころもうつなり槇の島人

海辺擣衣 堀起護家当座

1010 浪こゝによるの浦風音さえて須磨の磯屋に衣うつなり

里擣衣

1011 秋風のよさむを月になくさめてころもうつなり更科の里

1012 風寒き常盤の里の小夜衣たへすや秋の声にうつらん

1013 吹おろすむこの山風夜や寒きなる尾の里に衣打なり

鹿児島住吉奉物哥に 同し心を

1014 陰くらき岡辺の里もすむ月にやゝあらはれて衣うつこゑ

句題哥の中に 家々擣秋練

1015 里ことに同し夜寒のから衣秋のうらみをかはしてやうつ

田家擣衣

1016 もりあかす小田のなるこに声そへてねぬよささひと衣うつらし

山家擣衣

1017 紅葉ちるは山の里の秋風に賤も錦のころもをやうつ

1018 山深みあらしにたへぬ松垣のまとをの衣今かうつらし

秋哥の中に

1019 里人も今は衣をうつせみのは山のあらしよさむなるらむ

嵐

1020 まさきちるゆふへをさむみふく風も嵐になりぬ秋の山里

1021 しほれ行草木か上を心にてあらしにたへぬ宿もはかなし

秋雨 高雲堂御当座

1022 しほれそふ花野の秋のいかならんあらしの末になひく村雨

1023 あれまより軒のしつくもふり増る野分の跡の秋の村雨

- 973 富士嶋の芦間の床もあらはれてたつや沢への月そよ深き
月前鹿
- 974 影たかき尾上の月の下風にまたすみのほる小男鹿の声
なく鹿のこゑの光もあらはれて妻まつ山に出る月かけ
月前舟
- 976 さ、波もしつまる夜半にすむ月の氷をわたる志賀の浦舟
亥刻より丑刻五十首哥の中に 同し心を
明わたる空や泊とちきるらし月にうかる、秋のうらふね
船中月
- 978 水馴棹あかてやくたすわたし舟月の光のさすにまかせて
すみのほる月の出汐にさそはれてあすの浪路を渡る浦船
行かへり月の光にさす棹の長き夜あかぬ秋のうらふね
月似鏡 百首哥の中に
- 981 榊葉にかけし鏡の影とめて月もくもらぬあまのかく山
月前衣
- 982 ふくる夜に塩くみたゆむ浦人や浪のぬれきぬ月にほすらん
月下擣衣
- 983 霜さ^{むさ}ゆるしつかさ、屋のうきふしも月に忘れて衣うつらし
こ、ろなき賤かきぬたも中々に月見ぬ人の夢さそふらむ
樵夫帰月
- 985 柴人の袖のかへさや送るらん同し山路をいつる月かけ

「
(73・オ)

「
(ウ)

- 986 漁火の影は跡なくすむ月に浦こく舟の数そ残れる
漁父棹月
月前遠望
- 987 雲もなき松浦か沖の沖津浪もろこしかけて月やすむらん
鳥かなくあつまも今や惜むらん心つくしの有明の月
月前遠情
- 988 久かたの月の宮このおもかけも思ふ心のほかにやはすむ
鳥かなくあつまも今や惜むらん心つくしの有明の月
月前思
- 990 いく人のなかめ捨にしかたみそと月にこと、ふ袖の上の露
月多秋友
- 991 露深きおもひはしるや秋ことになれて友なふ袖の上の月
秋ことの露けき袖にやとしきてかはらぬ友と向ふ月影
百首哥中に 月忘憂
- 992 秋よた、うらみやはてんよなくの月になくさむ心ならずは
惜月
- 994 身のうさもふけて数そふ思ひかななくさむ月のあかぬなこりに
身ひとつの秋のこ、ろそかき曇る傾ふく月をおしむ余りに
擣衣
- 996 たか袖もたへぬ夜寒を身ひとつの秋にうらみて衣うつらし
きく人もぬぬようら^むみの唐衣をのれのみとや打あかすらん
秋風のまたたか里にさそふらん夜半のきぬたの遠さかる声

「
(ウ)

- 950 韻歌百首よみける中に
花に見し人目もかれて山里の月のあるしはたれか尋ねん
或人の山莊清音亭といへるに 月見にまかりて
- 951 世はなれて月もすむらん谷水の音さへ清き山の下の
ちりの世をよそにへたて、山住の心の月もすみ増るらし
- 952 月あかき夜 風月楼のあるし季慶によみて遣しける
- 953 山陰の秋にこゝろやすますらん月明らかに風清き夜は
閑居月
- 954 あるしたにすみうき宿の八重葎かれすも月のいくよとふらん
露わけて人はとひくる夜半もなし情ありけり蓬生の月
」
(71・オ)
- 955 韻歌百首の中に
あくかるゝこゝろもともにへたてあらし光をわかつ月の隣は
- 956 月あかき夜 或人の許に申つかはしける
- 957 すみわふる月のあはれをきてもとへ浅茅か庭は露ふかくとも
庭のとくさに月のやとれるを見て
- 958 すすくゝに月も光やみかくらん庭のとくさの露のしら玉
月前萩 月十五首会に
- 959 音信もさやかにけり月かけのとひ来る庭の萩の上風
月前萩
- 960 さく花の色なる露にやとりきて月もにほへる庭の萩原
月前薄
- 961 やとりくる葉末の露も打なひきすゝきにおもる野への月影
」
(ウ)
- 962 花月五十首の中に 月前草花
秋深き花野の露に影とめて色の千種に月そうつろふ
菊籬月
- 963 すむ月も千年の秋の色やそふかれせぬ菊の花のまかきに
秋寒きまかきの菊の花の上にひかりも匂ふ月のはつ霜
- 964 月前竹 玉池楼月十五首会
- 965 風そよく小枝をわけてもる月の光もなひくまとのくれ竹
置あまる露をとひきて呉竹の長さよあかさやとる月影
- 966 松間月
- 967 雲はらふ嵐の松のこのまよりしくれてのほる山端の月
月前松風
- 968 浮雲は跡なくはれて山のはの月にしくるゝ松風のこゑ
花月五十首会に 月前虫
- 969 をく露もくれ行まゝにあらはれてむしのねすめる浅ちふの月
」
(72・オ)
- 970 雲霧は羽風にはれてとふ鷹の影やまさこの月の隈なる
嶺こゆる数もさやかにはるゝよの月より落る鷹の一つら
- 971 月前鶉
- 972 なく聲も秋の野風にすみのほる鶉の床のよはの月影
月前鶉

- 926 沖津浪千里をかけて夕汐の入江の月の影そみちくる
 927 夜舟こく音もふけるの浦浪に戸渡る月の影そすみ行
 海辺月
 928 うつらなく入江の尾花露ちりて月もよさむのまの、浦風
 心なきあまのけふりも吹しきて月のひかりやすまの浦かせ
 浦月
 929 よなくの影もしほにくみそへて月にやなる、袖のうら人
 930 もしほくむ袖や夜寒の秋風に月の氷をよする浦浪
 931 芦たつのなくねもさむし沖津風ふけるの浦のよはの月影
 浜月 月十五首会に
 932 影やとす浪もひとつに吹上の浜かせ白し秋のよのつき
 韻歌百首よみける中に
 933 さらに又春の海へのみるめをもとはしな月のすみ吉の浜
 湊月
 934 舟とむる浦の湊の浪の上に月もうきねの影そさひしき
 磯月
 935 月かけもやとりわふらん塩風のあらいそ浪のまくらとひきて
 里月
 936 久方の中なる里にすむ人はいか、てりそふ月を見るらむ
 花洛月 十五夜月十五首会の中
 938 月もまた秋の盛とてり増る光を花のみやことや見ん

「
(ウ)

- 939 おも影をすみこし人のかたみにて里は野となる浅茅生の月
 故郷月
 社頭月
 940 ます鏡かけしその世のおも影もうつす神路の山のはの月
 (よろしく聞え候)
 941 やとりくる月も光をやはらけていくよすむらんいす、川浪
 古寺月
 942 待つにふくあらしもたえて露霜のふりぬる寺そ月にさひしき
 943 あかむすふあかつきことの月見ても西に心やすみ染の袖
 古寺残月
 944 しみみつむ袖にやなる、山寺の苔路の露に有明の月
 句題哥の中に 江声入秋寺
 945 ふもとなる入江の浪の音までもいそ山寺の月にさやけき
 ある山寺の宝樹園といへるに 月見にまかりける時
 玉をなす宝の木さのしら露も御法の露や猶みかくらん
 田家月
 946 山田もるしつかかりほのかりそめもねられぬ床になる、月影
 花月五十首哥の中に 山家月
 947 まつの戸をた、く嵐も音たえて独み山の月そふけゆく
 亥刻より丑刻を限り五十首哥よみける時 同し心を
 948 山深くむすふ軒端の下水に月もうき世をへたて、やすむ

「
(ウ)

「
(70・オ)

- 901 住あらず野守か庵もこゝろあれや月に馴たる露のやとりは
 亥刻より丑刻を限り五十首哥よみける時 野径月
 分まよふ野路のさ、原さよふけて袖に数そふ露の月かけ
 橋月
- 902 さそはるゝゆきゝの袖の打はへて月もよわたる里の中はし
 打わたす勢田の長橋長き夜の月にいくたひ行帰るらん
 かすゝに光をわけて八橋のたえすや月もすみ渡るらむ
 河月
- 903 秋ふくる河瀬の浪も音さえて氷やいそく夜半の月影
 名所川月 飛鳥井卿月次御題の中
- 904 月影もすみまさりけり久方の中なる河の水の秋かせ
 かすゝに夜の光もあらはれて月にみかける玉川のなみ
 いかたしの夜床や秋もさえぬらん月は氷ににふの柚川
 河月似氷 同十首哥の中
- 905 山河の水にくたす高瀬舟棹のしづくに月そくたくる
 隴月
- 906 落瀧津よとまぬ浪のしら糸によるの水をむすふ月影
 岩浪の音もくもらぬ瀧津せにしくれてすめる夜半の月影
 花月五十首哥の中に 月照瀧水
- 907 池月
 しら玉の数もさやかにすむ月のこほりにみかく山の滝津瀬
- 908 影うつす水の光も広沢の池のかゝみと月にくもらぬ
 月あかき夜 をのれか水亭に友とちの語らひ来りける
 とき 池月といへる事を
- 909 やとりきてへたてぬ月の契かな芦間かくれの宿の池水
 折ふしに猶もことゝへ池水の芦間の月はかけうすくとも
 江月
- 910 秋寒きみなどをかけてなこの江の芦の穂浪に氷る月影
 水底にうつろふ月もなには江のものにうつもるゝ玉とみゆらん
 花月五十首哥の中に 江上月
- 911 浪の上にこれも玉しく光かななには堀江の秋のよの月
 風月楼にて月見ける時
- 912 いそ山の霧吹払ふ秋風に入江をかけて月すみわたる
 湖月
- 913 雲はるゝ山は鏡の影とめて鳩てる海に月そうつろふ
 秋風も尾花か浪にしつまりて月そこほれるまのゝ入海
 湖上月明 月十首哥の中
- 914 さゝ波のくたく光もかす見えてにほてる月に浦風そふく
 海月
- 915 舟人も同しうきねの床の海やぬれてやとかる浪の上の月
 海上月
- 916 紀の海や浪のいつくもはるゝよの月にうかへる浦のはつ島
 海上月

「(68・オ)

「(ウ)

「(69・オ)

「(ウ)

- 888 887 886 885 884
 883
 882 881
 880 879
 878
 877 876 875
- 月前霧
 心なきたか山もとのけふりかと立そふきりや月にうらみん
 澄渡る月のあかしの浦浪に島かけ遠く残る夕霧
 海原は月に成ゆく秋かせにうす霧まよふいその山かけ
 游江亭月十五首会に 同し心を
 ゆく水にうきて立そふ夕霧も月に吹しくよるの河風
 山月
 河霧もはれてくまなき山の名の嵐や月の光なるらむ
 照増る光も高き山鳥の尾ろのか、みや秋のよの月
 名所山月 飛鳥井卿月次御題の中
 鹿のねもあらしの末にすみのほる高まと山の秋のよの月
 浅間山見やはとかめぬ烟さへ月にたてしと払ふ秋かせ
 閑山月
 岩つたふ苔の雫の音までもさやかにすめるみやまへの月
 長月の月あか、りける夜 くまはら山と云に月見にまかりて
 あるいほりにやとりける時
 月のくまはらひつくして雲霧の跡なきみねにすめる秋かせ
 ふしなれぬよさむをそへてさ、のはのみ山の月に秋風そふく
 秋寒きあらしはたえて奥山の楨のしづくにこほる月かけ
 こ、ろさへすみ増りけり奥山の月にかすそふ小男鹿の声
 ふくるよの尾上に遠き鹿のねを軒端の月にすましてそきく
- 889
 890 889
 891
 892
 893
 894
 895
 896
 897
 898
 899
 900
- いはそ、くかけひの音もふくるよの月の為とやすみ増るらん
 奥山の秋のあはれも色そひぬふけ行月のすむにまかせて
 深山暁月 月十首哥の中
 深く風も露にしつまる奥山の楨の葉白し有明の月
 岡月
 旅人のゆき、の岡にすむ月やよるもこえよと猶さそふらん
 杜月
 かすく、にわかる、千枝の宿りかな信田の杜の露の月影
 花月五十首哥の中に 杜間月
 秋の色に月そうつろふ露霜の染るともなき柏木のもり
 関月
 不破の関あれしいた屋のいたつらによなく、月やもり明すらん
 野月
 あくかる、月を千里のしるへにてゆく末とはんむさし野の原
 露白き浅茅か底の虫のねもさやかにすめる野への月かけ
 花月五十首哥の中に 野月霧深
 下葉までやとりもらさす百草の花野にあまる露の月影
 野外月
 舟よはふ遠の川浪音ふけてよと野の月にすめる秋かせ
 野店月
 心なき野もいかいほの草の戸もさすかに月のかけはへたてす
- (66・オ)
 (67・オ)

- 852 十三夜にいさ、か思ふ事とも有ける時 濁月を見て
名にしおふゆふへもはれぬ身ひとつの秋の思ひや長月のかけ
待月
- 853 雲霧もあらし待いて、山のはの月よりさきにすむ心かな
或人の山莊に月見にまかりける時 庭なる石井を結ふとて
心すむいは井の水よ山陰の月待つ程は立よりて見む
高山待月
- 854 雪の色もかさねてしらむふしのねに猶出かての月そまたる、
海上待月
- 855 こゝろあれやもしほの烟たきけちて月まつ浪にいつる舟人
不知夜月
- 856 秋風も待出て見ん山のはのいさよふ月にかゝるうき雲
八月十六夜 ある山里に月見にまかりける時
たかねより出てもしはし山陰の木々のこのまにいさよひの月
待出るよそのたかねの月影もしはしいさよふこかくれの宿
臥待月
- 857 しはし猶葉分にととき光哉軒端の竹のふし待のつき
停午月
- 858 入をおしみ出るをまちし山のはもいつれ□遠き中空の月
夕月
- 862 照そむる西こそ秋の夕月夜夜をへてそはん影そまたる、
「
(65・オ)
- 863 立こめし木末あらはに見えそめて霧わけのほる山のはの月
月初昇
花月雪三十首哥の中に
- 864 秋山あち山のすそ野の浅茅露見えてかつくみねの月そうつろふ
月前風
- 865 うつり行野への千草の秋かせにやとりさためぬ露の月影
影やとす軒端の荻の露ながら月も身にしむ袖の秋かせ
花月五十首哥の中に 同し心を
- 866 秋風もいと、夜寒やならすらんはつ霜いそく月のひかりに
月三十首哥中に 月前清風
- 867 澄るよの月や身にしむ色ならん吹としもなき袖の秋かせ
草木には音せぬ夜半もすむ月の光たかねよりふくにさむき袖ヒビヒビヒビの秋風の声
- 868 風月楼といへるに月見にまかりける時
雲霧はよそにはらひてすむ月の光ををくるみねの秋風
月前雨
- 870 いくたひか山のはしらておしむらんまよふ雨ふなひく中そらの月
雨後月
- 871 はる、よの月のやとりとむすふらん雨のなこりの庭のしら露
村雨のなこりの露の数見えて茅か軒端にすかる月かけ
月前雲
- 872 なかめわひぬそら行月もいくたひかいく村雲に入をおしみて
- 873 874

- 828 うつらなく野への朝露かつきえて日影ほのめく嶺の薄霧
河霧
- 829 月かけははれゆく宇治の山風に河瀬の霧そうきて流る、
河上霧
- 830 明渡る山は朝日にあらはれて霧の下ゆく宇治の河浪
朝風のふく跡見えて行水になひくもうすきせ、の川霧
水郷霧
- 832 浪の上はなひくもくらき朝霧にうきてそあくる川つらの里
子細ありてこもりあける秋の比 増水氏輔か許より
秋草の花野もよそに思ふらん八重立こむる霧のまかきはと
申贈りければ かへし
- 833 秋草の花の色香も何ならず霧のまかきにかきこもる身は
駒迎 百首哥の中に
- 834 秋ことのためしにひくや曇りなき世に逢坂の望月の駒
月
- 835 万代の年なみかけて曇りなき秋津島ねの秋の月影
うき雲は山のは遠く吹すて、空ゆく月に残る秋かせ
もろこしもへたてぬ影や仰くらんとよ芦原の秋のよの月
てらす月影 飛鳥井卿句題三十首の中
- 838 海山もあまねくてらす月影にくもりなき世の秋は見ゆらん
八月十五夜

「
(63・オ)

- 839 ます鏡ちりもくもらぬ君か代の秋の光や望月のそら
□つくかは秋の思ひの晴さらん名におふ月のかけを迎へて
十五夜に 玉池楼月見の御会に
- 840 うろくつの数もかくれす池水のなひくもなかの月のくまなさ
同じく 海のほとりに月見にまかりける時
- 841 名にしおふ空よりかけて海原の浪の千里に満る月かけ
同じく ある山寺にまかりて
- 842 山寺の板井の水の底までも満たる月のかけそさやけき
世に満て遍ねく照らす影なれや鷺の高ねの秋夜の月
同じき夜に 丸野秀晋か許に申遣はしける
- 843 名にしおふゆふへの月も心からすみます宿の光をそおもふ
同じ夜に 雨のふりける時
- 844 雨雲の深きうらみも立そひて月もさかりの名こそおしけれ
雨くらき最中の空よ月の名も満□□かたき浮世なりけり
またれこし秋のこよひの村雨に名のみ満ぬる望月の影
閏八月十五夜 月を見て
- 846 玉くしけふた、ひすめる望月の光や秋にみかきそふらむ
九月十三夜 人々月見ける時
- 847 かすくの詞の露の玉くしけふた夜の秋の月そくもらぬ
同じ夜に 川月といへる事を
- 851 秋の名も流れそひけり川水のもなかの後にすめる月かけ

「
(64・オ)

「
(ウ)

- 803 なひきそふいなはの雲の秋風に田面の露や打しくる□ん
 田家秋興
 804 かりはこふ賤か門田のまち／＼に世はとみ草の秋そにきはふ
 田家秋寒
 805 もるいほのねぬよを寒み露霜のをかへの早田色付にけり
 秋哥の中に
 806 鴈のくる伏見の沢田色つきて夜寒になりぬ秋の山風
 虫のねは庭の浅茅にうつもれて払はぬ露に秋風そふく
 秋風
 807 露深き軒の忍ふは吹すて、かきほの荻にさはく秋かせ
 海辺秋風
 808 湊江や夕汐かけてす、しさも袖にみちたる秋のうら風
 下露も袖にみたれて夕塩の入江の松に秋かせそふく
 秋夕
 811 置露も袖にそ余るさひしさのことはりすくる秋のゆふへは
 おもひやる山路の岩木それたにも秋のゆふへは露けからすや
 812 たかりもたへぬは同し夕かとは、や人に秋のあはれを
 伊勢太神宮に五十首哥奉りける時 同し心を
 814 身のうさも思ひのこさぬ夕とはたか秋よりかならひきぬらん
 宮内正八幡宮奉納哥の中に 秋夕思
 815 秋よなど詠めすて、も哀さのしゐて身にそふ夕なるらん

「
 (61・オ)

- 816 たかりも同しゆふへを身ひとつの秋になしては何かこつらむ
 秋夕情
 817 こ、ろなき草の袂の露けさも身のたくひなる秋の夕暮
 秋夕雨
 818 袖ぬらす身のならばしの夕露もうきは数そふ秋のむら雨
 風をのみうらみなれたる夕暮の軒端の荻に村雨の□糸
 819 秋風のつらさならひし荻の葉に音つれかはる夕暮の雨
 秋夕露 百首哥の中
 820 袖の上の露もおもひの数々にみたれてつらき秋の夕くれ
 山家秋夕
 821 世をいとふこ、ろや秋にかはるらん住うき山の夕くれのそら
 韻哥百首よみける中に
 822 世をよそにおもひすて、も夕暮のうきは身にそふみ山への秋
 稲妻
 823 蜻蛉の小野の浅茅の露の上にこれもはかなくかよふ稲妻
 霧
 824 ふく風に月まつみねはや、晴て山もとくらき秋の夕きり
 立まよふふもとの霧や深からん空にそうかふ明ほの、山
 朝霧
 826 小初瀬の山のはくらき朝霧に尾上のかねの声そ明行
 秋朝と云事を

「
 (62・オ)

「
 (ウ)

778 妻こひのことはりすくる鹿のねは秋の哀もたへすとやなく

韻歌百首の中に

779 風ふくの身にしみそむる秋よりや尾上の鹿もねにはなくらん

曉鹿 百首哥中に

780 有明ありあけのつれなき妻をとひわひてうきやあけに鹿やゆなくらん

夕鹿

781 きく人も秋のゆふへはねにそなく鹿のなみたを袖にうつして

伊勢太神宮に五十首哥奉りける時 夜鹿

782 夜寒なる野へのふしとの初霜を月に恨みて鹿やなくらん

夜聞鹿 福島行通家当座

783 きく人も身にしむ比の露霜にねぬよをわひて鹿や鳴らん

784 夢さそふ外山の嵐さよふけて枕にのこるさをしかの声

深更鹿

785 秋風もふくるよかふく秋風寒よみなく鹿の妻とふ山に月そ傾ふく

山鹿

786 妻秋寒こふる姥捨山の月影になくさめかねて鹿や鳴らん

787 奥山の岩木か中もうき事は秋のならひと鹿やなくらん

尾上の鹿は 飛鳥井卿句題三十首の中

788 山鳥の尾上の鹿は秋のよの長き思ひに妻をこふらむ

秋の夜 くま原といへる山中にやとりける時

789 奥山の嵐のまくらなれぬ夜にことゝひあかす小男鹿の声

岡鹿

790 紅葉あきばのいろに出てやなく鹿のならしの岡に妻をとふらん

791 小男鹿の忍ふの岡のしのすゝきはにあらはれて妻や恋らん

野鹿

792 うらかるゝ夜半の草ふし月さえて鹿のね寒さし野への秋風

韻歌百首よみける中に

793 朝霧の立野の原になく鹿は帰る山路や猶迷ふらん

海辺鹿 末川久命君御亭御会

794 あまもさそ秋や身にしむ夜半ならん鹿のねさそ磯の山風

795 心なきあまの寐覚もいかならん磯山ちかきさをしかのこゑ

田辺鹿 百首哥の中に

796 しら露のをくての稲葉打よきふけ行月に鹿ぞ鳴なる

秋田

797 もる袖も夜さむからし露霜のをくての稲葉色かはる頃

798 外面なる刈田の夕日影さひてよそのをしねに秋風そふく

福島引通家会に 同し心を

799 風さそふ山田のなるこ音たえていなはか末になひくゆふ露

秋田風

800 山田もる身にもおとろくね覚哉ひかてなるこに秋風のこゑ

801 くれ深き山田のわさほ打なひき葉の□□露に秋風そふく

802 よせかへす立稲のほなみのはるかと浦風わたる秋のみなと田

754 霜寒き浅茅か原のきりくすともに枯ゆくねをや鳴らん
 句題三十首哥の中に 早蛩鳴復歇

755 鳴そむる秋の浅野のきりくす草のはつかに声もつゝかす
 雁 百首哥の中に

756 嶺こゆるつはさも無なしほるらん雲路霧たつ空のはるけき初雁の声
 雁初来

757 雲の波たつをいくへをわけてあま小舟はつかりかねのけさはきつらん
 朝初雁 (58・オ)

758 山のはの朝日いさよふ薄霧にほのくなくひく鴈の一つら
 韻哥百首の中に

759 露霜の朝けを寒みをかへなるわさ田かりかね今やきぬらん
 夕初雁

760 夕くれの月待いつるたかねよともにさやけき初鴈のこゑ
 夜雁

761 長月の月の夜寒のはつ霜に衣かりかねうらみてやなく
 田雁

762 夕日さす田面の霧の末はれていな葉に落る初鴈の影

763 露霜のをかへの小田も色つきぬなきてそ渡る鴈の泪に
 旅宿聞雁

764 たひ人の草のまくらに聞ゆなり秋もよさむの衣かりかね
 雁作字 (ウ)

765 薄霧によみもわかれぬひとつらはたか待えたる鴈の玉札
 夕鳴

766 月遅き田面の沢をたつ鳴のはおともくらき水のゆふ霧
 沢鳴

767 露深き野沢の芦のふしわひて夜寒の床を鳴や立らん
 さそはるゝ夢もはかなし山沢の水に数かく鳴のはねかき
 田鳴

769 よもすから山田もる身のうき事も鳴の羽搔かそへてやきく
 鶉

770 色かはる浅茅か原の秋風にゆふ露さむみうつらなくなり
 夕鶉

771 陰深きふもとの野への夕霧になくやうつらのほのかな□声
 野鶉 林館御当座 (59・オ)

772 ふしわひてうつらなく也露霜のふる野の床や夜寒成らん
 霜さゆる秋の末野のかた鶉ねぬよの月にうらみてやなく
 風たちてうつらなく也片岡の裾野の尾花今かちるらし
 小鷹狩

773 霜さゆる秋の末野のかた鶉ねぬよの月にうらみてやなく

774 風たちてうつらなく也片岡の裾野の尾花今かちるらし

775 是したかをすゑ野の尾花打なひき袖もしらふに秋風ぞ吹
 狩衣真荘にすらんはしたかのとや野の露に袖をまかせて
 鹿

776 萩か花ひもとく野への秋風に妻とふ鹿のなかぬ夜もなし

730 露よいかにごゝろありてや乱らん衣もかけぬ秋のたもとに

夕露 百首哥の中に

731 草葉にとなに思ひけん心よりをきけるものを袖のゆふ露

田露

732 もる袖もつゝみやかねん秋の田のいな葉にあまる露の恵を

閑庭露

733 あれ増る庭の浅茅の末葉より袖にもあまる秋の夕露

飛鳥井卿句題三十首の中に なひく浅茅のと云事を

734 打なひく浅茅の末の秋風にやとりさためぬ野へのゆふ露

すむ月の影をおもけに打なひく浅茅の露の数もかくれす
「ウ」

枕露 末川久命君御亭当座

736 秋もまたなれぬ寐覚の手枕にいつより露の結ひをくらん

737 秋のよの長き思ひのかすくくにみたれてむすふ露のたまくら

虫

738 日影なき霧のまかきの下露にくるゝもまたぬまつ虫の声

739 なくこゑもいとゝ数そふ月かけのふくるや虫のうらみなるらん

尋虫 月次三首哥の中

740 なく方をとひきても猶我ならぬ人まつ虫かこゑそうらむる

虫声滋

741 鳴虫のよるのおもひもさまくにかはれはかはるうきねなるらん

韻哥百首よみける中に

742 虫のねもあはれやそふるゆふ風の秋をしらふる松のうてなに

夕虫

743 露むすふ夕日かくれの浅茅生に夜をまつ虫や声急□らん

夜虫

744 草むらの露もさやかにすめる夜の月にかすそふ虫のこゑく

745 夜寒なる浅茅の月の初霜にうら枯いそく野への虫のね

野虫

746 くるゝ野の露と月との秋風に乱れてすめる虫の声かな

旅宿虫

747 鳴よるも同じ夜寒かきりくす露にやとかる草のまくらは

748 きりくすかたらひあかせふる郷の夢もむすはぬ草のかりねに

閑庭虫

749 露しけき蓬か庭の夕暮ををのか秋とや虫もなくらん

松虫

750 いく千世の秋もかれせぬ契かな小松か原の松むしのこゑ
「ウ」

鈴虫 末川君御亭当座

751 夕露のふり捨かたきなり哉わくる花野の鈴虫の声

752 かり衣すそ野の暮にきこゆ也鷹の尾ふさの鈴虫の声

はた織虫

753 唐衣ころも夜寒の秋かせにはた織虫のこゑうらむなり

蟋蟀

- 706 隙もなくなひく尾花に旅人の袖や数そふ野路の秋風
薄露
- 707 しほれふす尾花か袖の朝露はたか手枕のなこりなるらん
百首哥中に 岡薄
- 708 わたつ海のなきさの岡の秋風に尾花か浪や立さはくらん
行路薄
- 709 打なひく尾花か末に秋風のゆき、も見ゆる野へのかよひ路
古砌薄
- 710 露けさも野と成にけり花薄うへしやいつの秋かせの庭
うつし裁したか故郷の世々の秋残る尾花か袖も露けき
- 711 閑庭薄 高雲堂御当座
- 712 まねくとも誰かはとはん花薄しけるま、なる庭の秋風
女郎花
- 713 ふく風もあたる野への女郎花のまくらや定めかぬらん
露深き手枕の野のをみなへし花よいかなる思ひそふらむ
女郎花露
- 714 をみなへし心よはくやなひくらんむすひもはてぬ露の契に
蘭 百首哥中
- 715 ほころひし花や盛の藤袴すそ野の風も香に匂ふなり
荳蔻
- 717 ふく風にたれゆへならぬかるかやも忍ひあへすや乱れそむらん

┌
(55・才)

- 718 いたつらに思ひみたれて露深き野へのかるかやかる人もなし
榿 末川久命君御亭当座
- 719 咲かはる色そ久しき朝かほの花は日ことにうつりはて、も
榿露
- 720 むすひをく契もろし朝顔の日影まつまの花の上の露
垣榿
- 721 松垣に日かけへたつる露のまを花の千とせとさける朝かほ
草花
- 722 打なひく花野の秋の朝しめり露そ千草の色にみたる、
咲ましる花の千種の色々に乱れて染る野への朝露
朝草花
- 723 袖の上も色の千種にうつりゆくかち野の草の花の朝露
鹿兒島住吉法楽に 同し心を
- 724 枝おもき露のまかきの朝きりに匂ひもしめる花のも、草
風動野花
- 725 もろくちる露と花とに跡見えて千草をつたふ野への秋風
句題哥の中に 秋蝶護籬花
- 726 住あらず賤かまかきに百草の花はこてふのもるにまかせて
露 飛鳥井卿月次御題の中
- 727 年ことにうき身の秋を深めてやたもとの露の数もそふらむ
もの思ふ寐覚を秋のやとりとや契りをくらん袖の上の露
- 728
- 729

┌
(56・才)

┌
(ウ)

- 683 七夕橋
天の川たえぬ契をいく秋もかけてやむすふ露の玉はし
- 684 恋渡る星の涙の露もけふ紅葉の橋の色にいつらむ
〔53・オ〕
- 685 七夕舟 堀起護家当座
銀河なれしわたせは秋ことにさしもまよはし妻むかへ舟
- 686 七夕枕
を^織ひ^女めも年に一夜やあまの川水かけ草の枕ゆふらむ
年ことにはかはずや固き岩枕天の河瀬のたえぬちきりを
- 687 七夕衣
まとをなる中やうらみん七夕のこよひかさぬる天のはころも
- 688 萩
老ちかき身には寐覚やならすらんふくるよことの萩の上風
さく人の心とつらきゆふへ哉た、なをさりの萩の上かせ
- 689 伊勢太神宮に五十首哥奉りける時 萩風
音つれぬひまこそ今はさひしけれき、馴し宿の萩の上風
- 690 飛岡天神奉納哥の中に 同し心を
〔ウ〕
今よりの夜半の寐覚もいかならん秋におとろく萩のうはかせ
- 691 夜萩 紙燭一寸を限りて二首哥よみける時
さそはる、夢の枕のよなくになれてもつらき萩の上かせ
- 692 深夜萩
老らくの物おもふらん寐覚までふけゆく萩の葉音にそしる
- 693 夕聞萩
ふくるよの夢のなこりや尋ぬらん枕にかよふ萩のうは風
- 694 さひしさの色には見えぬ秋風をゆふへの萩の上葉にそきく
江辺曉萩
- 695 舟とむるあまやね覚に聞わひん入江夜深き萩のうは風
萩露
- 696 よなくに乱れやまさる小男鹿の妻とふ野への萩の上の露
ぬれつ、もあかてやおらん真萩原色そふ露に袖をまかせて
伊勢太神宮に五十首哥奉りける時 同し心を
〔54・オ〕
- 697 なく鴈の涙の露も花の上に落ちて色付く庭の萩原
朝萩
- 698 なく鹿の朝たつ小野の真萩原涙や花の露とをくらん
水辺萩
- 699 萩か花あたにちりゆく山川の水には鹿のしからみもかな
故郷萩
- 700 うつしうへし秋やいくよのふる郷に本あらの小萩花も少き
秋の野にまかりける時 萩の盛なる一枝を折て 或人のもと
にそへてつかはしける
- 701 鹿のねも心にうつせひと枝の真萩に野への秋は見ゆらん
薄
- 702 暮か、る野へのゆき、は絶はて、尾花か袖に残る秋かせ
〔ウ〕

初秋月

ちりそむる一葉の桐の木間より秋ほのめかす三日月の影

花月五十首哥の中に 同し心を

一葉ちるこのまに見えて月の色も心つくしの秋のはつしほ

初秋雲 飛鳥井通家当座

吹かはる風も行ゑもけさ見えて秋たつ空になひくしら雲

秋のはつ風 飛鳥井卿句題三十首の中

此ねぬる朝けの秋のはつ風に落るひと葉の露もすゝしき

ふきかはるゆふへの秋のはつ風や心のうさをまつさそふらむ

幽栖秋来

置そむる露のよすかに跡見えて秋はきにけり蓬生の庭

いさゝさか子細ありてとちこもりぬける秋の初に

かきこもる葎の宿にけふよりは露けさそへて秋も来にけり

今は世にあき風たちぬわひ人の袖より露や置はしむらん

五十に成ける年の秋のはしめに

袖上の露も数そふもゝとせのなかはすき行秋のはつ風

早涼

草木にはまた音たてぬ涼しさを袖に待とる秋の朝かせ

涼風入簾

暮深き露の玉たれひまとめてすゝしき送る軒の秋風

すゝしきはひまもる風に待いてつ月なきよひの窓のすたれに

残暑 飛鳥井卿月次御題の中

けふも猶外面の楸の下すゝみてる日は秋の空としもなし

昨日今日秋に驚く風もなし猶すゝしさをまつの下陰

七夕

久方の天の河浪世さかけてたえぬは星の逢瀬なりけり

秋たなはたの五百はた衣いをいひひの長き契を重ねきぬらむ

伊勢太神宮に五十首哥奉りける時 七夕契久

秋ことにむすひやそふるたなはたの手引の糸の絶ぬ契を

二星適逢 百首哥の中

ををりをひをめをはをけをふをそをかをさをしをのたまをくをにをみたをれてを結をふを契をなるをらん

「ウ」

七夕月

七夕の天の河原せの河霧に月のみふねやさしまよふらん

七夕雲

天の川星の逢瀬に渡すらん深くもなひく雲のかけはし

世に忍ふ逢瀬なりとや天の川雲のとはりも立おほふらん

天の河立そふ雲の衣手も星の契や猶かさぬらむ

七夕霧

ひこ星の妻まつ空に立そひてゆふへやいそく天の川霧

七夕露 七夕七首会に

うれしさをこよひかつゝむ織女のたもとの露も心してをけ

「ウ」
(52才)

「ウ」

642 穂にはまた出ぬ夏野のしの薄しのひに秋の風かよふらし

「 (50・オ)

夏牆といふ事を

643 よなくはす、しくなりぬ芦垣にまちかき秋の風もかよひて

夏祓

644 御祓川夕風す、し麻の葉のよるせの浪に秋も立らん

645 身のうさをはらふのみかほみそきして帰る袂に夏も残らす

荒和祓 百首哥の中に

646 麻の葉はさそひつくしてみそき川水の心も秋いそくらし

伊勢太神宮に五十首哥奉りける時 六月祓

647 年なみもなかはすきけり御祓川ぬさもとまらぬ水の早瀬に

「 (ウ)

すさひ草 卷之三

秋之部

立秋

648 風の音も夜のまにかはる萩の葉のうらさひしくも秋や立らん

649 下萩のしのひし声もけさよりはほにあらはる、秋のはつ風

夜立秋

650 風かはる夜半の枕におとろけはそ、や秋なる軒のした萩

秋立ける夜よめる

651 夢路より秋やきぬらんうた、ねのさむる枕に風かはるなり

652 露^{ちる}もまつ身にしみてかた敷の袖よりふくや秋の初風

新秋風

653 けさよりは衣手す、しうつせみのは山かすその秋の初かせ

654 吹かはる萩の葉風のさやかに音にたて、や秋のきぬらん

新秋露

655 風^{にちる}さそふ桐の一葉はそれなから秋にまつちる袖のゆふ露

百首哥よみける中に 早秋

656 さひしさはまかきの萩の音よりも心そかはる秋のはつかせ

田早秋

657 けふよりは小田の初穂^{むさ}もあらはれて年ある色^にに秋はきにけり

初秋

658 袖の上にならぬ露もさそひきて衣手うすし秋の初かせ

「 (51・オ)

海辺夕立

- 619 なるかみはすまの上野に音たて、明石のせとに残るゆふ立
 620 かたへす、しき 飛鳥井卿句題の中
 621 ふく風もかたへす、しき空ならんてる日なからにすくる夕立」(ウ)
 夕立晴
 622 いな妻の光そ残る夕立の雨ははれゆく遠のたかねに
 623 ちる露に跡もしくれて夕立のなこりす、しき軒の松かせ
 ひくらしの声 句題十首の中
 624 雨はる、木末の露に風すきて残るはす、し日くらしの声
 625 むら雨の雲はははる、雨への松かせにのきは山風に残る木末の日くらしのこゑ
 杜蟬
 626 村雨のしつくのもりに声たて、蟬の羽衣ぬれつ、やなく
 627 ねをたて、なけきの杜になく蟬の涙もしけし木々の下露
 樹上蟬
 628 色かはる杜の木末のわくら葉に時雨やいそく蟬のこゑく
 扇
 629 うつし糸の千草をつたふ秋風も扇のうちに見えて涼しき
 ある人雪をゑかける扇を見せければ
 630 ならず手に木末の雪をうつし糸の扇の風や夏の外なる
 閨中扇
 秋風もよなくまつやかよらん月をやとせる閨の扇に

納涼

- 631 苔むしる露も風もしきそへてまとゐす、しき松の下陰
 632 村雨のなこりの露の玉かしはゆふ風さそふ陰のす、しき
 夕納涼
 633 袖の上は夏も残らぬゆふへかな下露はらふ松のあらしに
 河辺納涼
 634 せく袖も夏なきよひの河風に氷をむすふ月の下水
 句題三十首哥の中に 水辺生晩涼
 635 打なひく岸根のをさ、露見えてす、しくなりぬ水の夕風
 杜納涼
 636 夏衣きつ、やなれん常盤木のしつくも袖にもりの下陰
 住吉社に十首哥奉りける時 樹陰納涼
 637 袖にもる夕日は夏の光にて秋にす、しきならの下かせ
 638 夏タの日日をよそにへたて、榎の葉のしける木陰外はかたへす、しき
 松下待風 飛鳥井卿月次御題の中
 639 浪あらふいそへの松の下す、み秋をよせくる浦風もかな
 晩風似秋
 640 す、しきは秋に驚く声なれや夕日かくれの庭の松かせ
 641 木かくれにまたこぬ秋やさそふらんならの葉そよく庭の夕風
 野草秋近

- 605 朝かほも同じ垣ほにをく露のやとりやかかはる夕顔のはな
蓮 百首哥の中に
- 604 603 にく露も光をそへてゆふかほの花にやつさぬたそかれの宿
をく露も光をそへてゆふかほの花にやつさぬたそかれの宿
こゝろなき賤か垣ほの花にたに光あはれやそはふるゆふかほの露
垣夕顔
- 602 怠りの身をいさめてや飛螢あつめぬ窓も光見すらむ
夕顔
- 601 あつめ見したか世の影か故郷の野となる庭にてらす螢は
窓螢
- 600 夏草のしけみか底下のさゝれ水てらすほたるの数もすくなき
故郷螢
- 599 なには江の芦のよことにとふ螢あまのたく火の数やそふらん
草間螢
- 598 朽にけん草葉もさらにもえ出て同じ沢辺に飛ふ螢かな
名所五十首哥の中に 難波江
百首哥の中に 沢螢
- 597 飛ふ螢おもひや深き池水のいひ出かたき身をこかすらむ
池螢
- 596 595 ゆく水の深き思ひかよるへなき身をうき草にもゆるほたるは
とふ螢をのか光も乱れ芦の露の玉ちるよるの河かせ
水辺螢
- 618 617 飛鳥川かはる淵瀬も時のまに猶定めなきゆふたちの空
なるかみの音も落きて瀧川のみかさそひ行夕立の雨
川夕立
- 616 吹おろす風もいく野にきをふらん大江の山の夕立の雲
大江山 飛鳥井卿月次御題の中
- 615 矢田の野は夕立すらしなるかみの音もあらちの山端の雲
夕立雲 堀起護家当座
- 614 613 日影さす外山にはれて行雲は又たかりの夕立のそら
穴師川水増るらし巻向の弓月か嶽のゆふたちの雨
夕立
- 612 611 風さゆる宇陀のひむろをもる人の袖にはいかて夏をわくらん
もる袖は夏も残らし奥山のひむろにさゆる櫛の下かせ
氷室
- 610 濁りなき池の心に咲いて、法の蓮の花そ妙なる
池蓮
- 609 608 浪こゆるうき葉の露の玉ちりて池のはちすにかほる朝かせ
池水の浮葉の露にやとりきて月もはちすの玉をそふらん
妙法山といへる山寺にて 池の蓮を見て
- 607 うき草に落てもしはし匂ふらん池のはちすの花のしら露
荷露
- 606 うろくつのすむとしられて池水に風のたえまもうこく蓮葉

572 鳩鳥もわけ迷ふらん夏草のしけみにとつる庭の池水
野夏草

573 夏深くしけりにけりな小男鹿も花の秋まつ野への萩原
夏歌の中に

574 風の音もまたほに出す夏草のしけみにまじる野への萩原
韻哥百首よみける中に

575 かりそめにとはれし跡もうつもれつしける夏野の草のいほりは
故郷夏草 福島行通家会

576 荒残る三のみちさへなつ草のうつむまゝなる露のふるさと
庭夏草

577 なたしこの花も色なきまかき哉たゝ夏草に庭をまかせて
やかて又色の千種の花に見ん同じ緑の夏ふかき庭
夏草滋

579 わひ人のとはれぬ宿の夏草はこゝろつからや猶しけるらむ
夏深き比 増水氏輔か許に訪らひまかりけるに そのあけの
日に氏輔より
夏草の露より深き情とははれし庭の跡にこそしれ と申贈
りければ かへしによみて遣はしける

580 浅からぬ詞の露よ夏草のかりそめにのみとひこしものを
百首哥の中に 瞿麦

581 塵ならてはらふゆふへの風もうし花の色そふ露の床夏

582 瞿麦露
むすひをく露もあたるゆふへ哉たか思ひねの床夏のはな
とこなつの花 飛鳥井卿句題三十首の中

583 草深きまかきの露も床夏の花にやわきて情をくらむ
くれなるの錦やしける床夏の花にかこへるしつか垣ねは
蚊遣火

584 明やすき月にうらみをかけそへぬ蚊遣くゆらす夜半の烟は
蚊遣たく我さへむせふおもひ哉世をあくたひのはれぬけふりに
夕立はかつくはれてかやり火のけふりによはる軒の山かせ
里蚊遣火

587 暮深きいくせの霧もかやり火のけふりにつゝく川つらの里
隣蚊遣火

588 中垣の末こそ烟打なひきたてぬこなたも軒の蚊やり火
虫

589 影うつす石間の水のわきかへりおもひくたけてとふほたるかも
浅からぬおもひにもえて浅沢の水のけふりにほたるとふかけ
夕螢

590 ゆくほたるしはしなすきそ夕くれの月まつ袖に影をうつして
よるは螢の 飛鳥井卿句題三十首の中

593 をく露もよるは螢の数そへてひかりすゝしき庭のあさちふ
さゝら波よるは螢の乱れきてすゝしさそふる庭の池水

594

- 548 天の戸のあくるもわかし五月雨の雲の迷ひにた、くくみなは」(ウ)
 夜水鶏
- 549 たか門をた、くくみな短夜の明方ちかき月にうかれて
 夏の末つ方 子細ありてとちこもりぬける比 水鶏をき、て
 心かきこもるむくらの門は心からからとつる葎はの門深み夜半の水鶏もた、くとはなし
 牛窓に泊りける夜 水鶏を聞いて
 牛窓の明る夜いそく浪まくらた、くくみなに夢もくたけて
 照射
- 552 うつせみのは山のほくし夜を重ねさしもむなく鹿や待らん
 連峯照射 尾上貞一家当座
- 553 立ならずともしの影の峯つ、きさすかに鹿のかくれかやなき
 鵜川
- 554 五月やみ迷ふへき身の後の世もしらてよなくう舟さすらし」
(44・オ)
 鵜川易明
- 555 大井川川浪はやくしらむ夜や鵜舟さす身のうきせなるらん
 夕河にさすか程なく澄渡る月やう舟のうきせなるらむ
 伊勢太神宮に五十首哥奉りける時 瀬鵜川
- 557 後の世の光をたのめうかひ舟河瀬の月はいとひはつとも
 夏月
- 558 五月雨の雲のかけはしとたえして渡りもあへす明るよの月
 百首哥よみける中に 同じ心を
- 559 山のはもしらてそ明る空の海雲の浪路の短夜の月
 夏月易明
- 560 露のまもやとれは明る夏刈の玉江の芦のみしかよの月
 風そよく野へのをさ、の短よに露を残してあくる月影
 夏月涼
- 562 吹わくる風を軒端の光にてならの木のまの月そす、しき
 雨後夏月
- 563 夕立のなこりの露やおもからん葉分の月になひく若竹
 よひの雨は軒のあやめにふりすきてなこりの露に匂ふ月影
 山夏月
- 565 山のはの花のしら雲跡きえてしける若葉に月そいさよふ
 湖上夏月 堀起護家当座
- 566 すみ渡る光は秋にほの海の浪のまもなくあくるよの月
 す、しさをのせてやかよふ月影も夏のよわたる志賀の浦舟
 韻歌百首の中に
- 568 とけやすき氷と見えて短夜の月すみわたる諏訪の湖
 夏草
- 569 いたつらにふみ迷ふ袖の露もうし道しある世の野への夏草」
(45・オ)
 をく露も同じ緑の色やそふ花なき頃の野への夏草
- 570 夏草蔵水
- 571 かくて世にすむかひもなし夏草のしけみか下の埋れ井の水

- 527 入日さす雲も色そふゆふへかな岡辺の樗雨はる、頃
 雨後樗 末川久命君御亭当座
- 528 雨はる、軒のあふちの夕風にぬれなからちる花もす、しき
 岡樗
- 529 樗さく岡辺の雲の晴やられて花のしつくや雨とふるらん
 韻歌百首の中に (42・オ)
- 530 むらさきの雲のなこりか古寺の傾く軒にさける樗は
 五月雨
- 531 軒端なるくもの糸筋くりかへしいくかへぬらんさみたれの比
 水まさる池のぬなはの打はへてさみたれくらす此頃の空
 名所五十首哥の中に 天香具山
- 532 五月雨の雲の衣手立そひてほすまも見えぬ天のかく山
 橋五月雨
- 533 五月雨に浪こす谷の川橋や落て朽木の名にも流れん
 沢五月雨
- 534 うつもれし野沢の芦の下水も葉末をこゆる五月雨の比
 韻歌百首の中に
- 535 鴉鳥のうきすもあれてさみたれのみかさにしつむ池の村芦
 川五月雨 (ウ)
- 536 晴やらぬ思ひや深きはし姫の身をうち川の五月雨の頃
 夏哥の中に 鈴鹿川
- 537
- 538 五月雨の日数ふり行鈴鹿川八十瀬も淵になりかはるまで
 浦五月雨
- 539 日数ふる浦の苦屋の庭たつみ浪にそつ、くさみたれのころ
 浜五月雨
- 540 浜つたひ立そふ雲のうき波に塩干も見えぬ五月雨の比
 山家五月雨 月次三首哥の中
- 541 かけてまつふるさと人も五月雨におもひたえたる谷の柴はし
 五月雨久
- 542 晴やられて月もいく夜を過ぬらんしの屋の軒のさみたれの頃
 をのれか草庵に末川周山君いらせ給ふへき御催有けるに」 (43・オ)
- 543 其夜五月雨いといたうふり出て得もいらせたまはさりければ
 いつにても雨の晴たらん夜にこそと仰有つるか それより二
 日をなんへて猶晴へきさまも見えさりければ よみて奉りし
 とはるへき晴間の月の影を見すまつよふりゆく五月雨の空
 御返し 周山君
- 544 とふて見ん月に日数はふるとても限あるへきさみたれの空
 水鶏
- 545 月にもと思ひとちむる草の戸をた、く水鶏そ人たのめなる
 槇の戸を押明方の月かけにた、く水鶏の声もさひしき
 暁水鶏 松元武安家当座
- 546 明方の月影さひし草の戸をた、くくぬなもほのかなる声

- 501 ぬれつ、も早苗とるなり五月雨の雲もおりたつ山の岡辺に
立つ、く田子のを笠の夕日影さすや岡へに早苗とる也
- 502 急早苗 末川君御亭当座
- 503 袖ぬらす葉末の露のゆふかけていそく早苗はとりもつくさす
夕月のかけやとる手に浮ふらん急くにつきぬ水の若苗
- 504 早苗日暮
- 505 帰るさは月待いてよ岡のへに早苗とる手はよしくる、とも
袖ぬれてとる手や急く若苗に葉のほる露の暮かゝるまで
- 506 百首哥よみける中に 山畦早苗
- 507 うへわたす水の早苗も緑そふ山田の畦の松のしたかけ
菖蒲 飛鳥井卿月次御題の中
- 508 水増る池のあやめや五月雨のふるきためしにけふはひかまし
引むすふ一夜はかりのあやめ草あかぬまくらに香をうつさはや
- 509 池菖蒲
- 510 風渡るあやめの葉末打なひきみたれてかほる池のあさ露
鳩鳥のうきねの床の池水にからぬあやめの枕をやゆふ
- 511 簷菖蒲
- 512 ふきそふる軒のあやめの朝風に忍ふの露も匂ふす、しさ
袖上菖蒲 飛鳥井卿月次御題の中
- 513 たか袖もへたてぬけふのならひとや同しあやめの香に匂ふらむ
曳菖蒲 高雲堂御当座
- 514 けふといへは水のあやめの長き根もたえせぬ世々の例にそひく
夏歌の中に
- 515 かたみにや深き匂ひをかはすらんあやめふきそふ軒の立はな
夏夕といふ事を
- 516 立花のしつুকも匂ふ村雨に軒端す、しきゆふやみの空
盧橘
- 517 夕日さす軒のしつুকもかほるなり花立はなの雨のなこりに
花たちはなに 飛鳥井卿句題三十首の中
- 518 雨はる、花立花に風すきて匂ひこほる、枝の夕露
ふるさとの花立はなに忍ふかなたか袖の香もしらぬ昔を
- 519 夜盧橘
- 520 匂ひくる光もす、し立花の花ちる里の夜半の月かけ
軒端もる月もさやけし立花の匂ひをうつす夜半の袂に
- 521 軒近きはな立花の小夜風にはひす、しきうた、ねの袖
橘薫袖
- 522 昔おもふ涙をそへて立花の匂ひもしめる夜半のころも手
盧橘薫暁袖
- 523 折しもあれ寐覚露けき袖の上に昔をかけて匂ふたちはな
むかし思ふねさめの袖に立花のたか名残とか猶匂ふらむ
- 524 樽
- 525 紫の雲をか軒にかほるなりさくやあふちの花の下かせ
- 526

- 477 句題三十首哥中に 杜鵑声似哭
ほと、きす涙やそふるわひ人のなくねともなふ夜半の枕に
- 478 雨中郭公
郭公なこりを雲に鳴すて、今ひとこゑのむら雨のそら
- 479 月前郭公
村雨ははれゆく空の月かけに又まちいつるやまほと、きす
はつこゑをもらすもうれし郭公月待出るよひの雲間に
- 480 山郭公
行くらす誰に契りて郭公深き山路の月になくらむ
- 481 月遅き木々の山のはと、きすさやかにもらす宵の一声
- 482 岡郭公
なく声もさやかにもらせ夕夜さすや岡辺の山ほと、きす
旅人のゆき、の岡の郭公こ、ろをとめてたれかきくらむ
- 483 杜郭公
なくこゑも老蘇のもりの郭公露に涙の色やそふらむ
- 484 名所五十首哥の中に 篠田杜
- 485 行かへりなくねもしけき郭公しの田のもりの千枝の思ひか
- 486 里郭公
- 487 郭公夜ふかきこゑは里人のふしみの夢のまくらをやとふ
- 488 山家郭公
山住の身にはかたらへ郭公うき世にしのはつねなりとも

「
(39・オ)

- 489 明石の浦に泊りける夜 郭公をき、て
ひと声はまたてもき、つ郭公ねぬ夜をうらむ浪の枕に
- 490 閏四月郭公 飛鳥井卿月次御題の中
百千かへり今をせになけ郭公花もかさなるうつき垣ほに
- 491 五月郭公
五月雨の軒の糸水くりかへし鳴ふりにけり山ほと、きす
あかす猶ふり出てなけ郭公をのか五月の雨のなこりに
- 492 六月郭公
みなつきのつきぬ思ひにほと、きすときすきてしもねをや鳴らん
- 493 郭公遍 末川君御亭当座
- 494 たか里も聞ふりぬらんほと、きすなくや五月の雨のよなく
- 495 まつ人の恨もはれて郭公たか里わかぬ月になくなり
- 496 夏哥の中に
早苗とる小田のしめ縄長き日にくりかへしなく郭公かな
- 497 早苗
暇なき田子のきのふの濡衣ほさてやけふも早苗とるらむ
- 498 夕日影す、しくはる、むら雨のしつくの田井に早苗とる也
- 499 伊勢太神宮に五十首哥奉りける時 同し心を
うへ渡す賤か早苗も雨露にうるほふ御世の秋いそくらし
- 500 採早苗 月次三首哥の中
さみたる、田中のもりのみしめ縄打はへけふも早苗とるなり

「
(40・オ)

「
(ウ)

郭公

あかなくのなこりをそへてひと声の後もまたる、郭公山ほと、きすかな

「(37・オ)

はつ声を猶やまつらん郭公なきすて、ゆく末の里人

鹿兒島住吉奉納哥の中に

人つてにき、も定めん郭公夢はかりなる夜半のはつねは

山ほと、きす 飛鳥井卿句題三十首の中

ゆく春のなこりおしまてけふよりははつねやまたん山ほと、きす

待郭公

待わひてこよひもあけぬ郭公いかなる月に契もろすの初音ぞ

まつ夜へは人もうらみん郭公はつねをいつと契ヒヒりたにせよ

草のねにあらはれてなけほと、きす軒の忍ふの程もふりにき

玉津島社に十首哥奉りける時 同し心を

ほと、きす契らぬよゐも一声をしるてやまたん村雨のそら

尋郭公 末川久命君御亭当座

「(ウ)

たつねいる山のかひなきほと、きす雲のいつくにもらす初音ぞ

むら雨も里わく空の郭公たれにとはまし宵の初声

初郭公

たか方をさしてとふらん郭公里なれそむるよひのひとこゑ

始聞郭公

鳴すくるなこりはよしや郭公誰もまつらん夜半のはつ声

人伝郭公

464 さのみなと我にはおしむほと、きす人つてにきく夜半のはつねを

夏の初つ方 鹿府の堀起護 尾上貞一はしめて訪らひ来りけ

る夜 題を分ちて歌よみけるに 聞郭公と云事を

うれしくもこと、ひ初る郭公下まつ比のちきりたかはて

はつ声を我を待とる郭公こと、ふ夜半の契うれしき

郭公幽 中神長岐家当座

「(38・オ)

いささらはさやかにもらせ郭公雲間の月のほのかなることゑ

軒端なる草のはつかの一声はよそにや忍ふ山ほと、きす

郭公近

やかて又遠さかりゆく郭公こすのと山に声をのこして

暁郭公

有明の月に契りてほと、きすいく里人の寐覚とふらむ

ほと、きす夢はかりなる一こゑを同し寐覚にたれかきくらん

夕郭公

月かけもさそひていてよ郭公また山深きゆふくれのこゑ

ひとこゑは月より先にもらすらん夕ある雲の山ほと、きす

夜郭公 亥刻より丑刻五十首哥の中

ましろまでかひある夜半の郭公またぬねさめに誰か聞らん

郭公驚夢

「(ウ)

深き夜の夢やとふらん郭公さむるまくらに声を残して

夢とのみき、やまかはん郭公うつ、に残すひと声も哉

476 475

474

473 472

471 470

469

468 467

466 465

464

- 427 鶯もかへる古巢の谷かくれ春にをくれし花やとふらん
鳥想残花枝
- 428 ちり残る春のかたみと鶯も羽かせやいとふ花のひとつ枝
句題三十首哥中に 夏木留鶯語
- 429 散花のねくらやおしむ夏山の青葉に残る鶯のこゑ
夏木黄鸝 飛鳥井卿月次御題の中
- 430 夏山の花なき枝にうくひすの声の匂ひや猶残すらん
遅桜花さく谷の鶯はこゑにも春を残してやなく
新樹
- 431 涼しくもしける桜の若みとり花より後の陰も立うき
新樹妨月
- 432 しけりては月さへうとく成にけり花にとはれし庭の梢も
句題三十首哥の中に 新樹葉成陰
- 433 いささらは花より後も立なれん若葉す、しき庭の木陰は
名残として
ヒヒヒヒヒヒ
- 434 新竹 飛鳥井卿月次御題の中
- 435 万代の霜をかさねんはしめとや露に色そふ庭の若竹
- 436 末遠き千世のさかへも今年より見えてすくなる庭の若竹
- 437 色にそむたれかし、ちの深見草とめるもあたの花の浮世に
思ひはたれか
- 438 置露もみかく光の深見草花やさかりの色にとむらん
- 439 色に香にあかね盛のはつか草日数を花の上にかそへて
- (ウ)

- 440 このまもる月にやまかふ卯花の咲もつ、かぬ庭の山陰
卯花
- 441 亥の刻より丑刻を限りて五十首哥よみける時 卯花似月
咲つ、く卯花垣の白妙に夕やみしらぬ里の月かけ
卯花盛 飛鳥井卿月次御題の中
- 442 すむ月も色やあらそふうの花の盛くまなき庭の籬に
月雪の光をうつすまかきかなさくやうつきの花の盛は
遠村卯花
- 443 くれそむる木の下やみも卯花の月にくもらぬ遠の山もと
路卯花 末川久命君御亭当座
- 444 分てしも跡やは見えん卯花の雪にうつめる野へのかよひ路
通路もまたうつもれて山陰にさくやうつきの花のしら雪
垣卯花
- 445 たつね見ん垣ほの桜ちる跡もかこふうつきの花のあるしは
籬卯花
- 446 咲うつむさえたやおもき卯花の雪より底になひくまかきは
へたてすむたか山陰の宿なれや世をうの花にかこふ籬は
葵 飛鳥井卿月次御題の中
- 447 これも又二葉に千世を契りてや松の尾山にあふひとるらん
籬葵 福島行通家会
- 448 朝日さす露の光の玉すたれかくる葵の色そす、しき
- 449 朝日さす露の光の玉すたれかくる葵の色そす、しき
- (ウ)

414 今はとて春に別る、うくひすはふるすの花の跡やとふらん

三月尽

415 惜みこし花うくひすのなこりまでけふを限にくる、春哉

三月尽暁

416 佐保姫の霞の袖の別路もなこり今はの春の明ほの

すさひ草 卷之二

夏の部

首夏

417 さくら花跡なくさそふ山かせもけふをうつきの名にや吹らん

伊勢太神宮に五十首哥奉りける時 同し心を

418 花衣けさたちかふるならはしに空もかすみの袖をわかる、

首夏藤

419 夏かけて猶立なれん藤浪の春をのこせる花のゆかりに

更衣

420 世中はあたる色の花衣たかこ、ろよりかへはしめけん

421 かはりゆく人の心の花ころもきのふの春をよそにへたて、

422 おしまれぬたか心より花染の袖の別をゆるしきぬらん

韻歌百首よみける中に

423 花染のわかれをしたふこ、ろさへうすきにならふ蟬の羽衣

卯月朔日伏見にやとりあけるに 更衣の心をよめと人の申け

れは

424 ふるさとの春のかたみの花衣けさぬきかふるならひさへうき

余花

425 谷陰はしらてや風の残すらん青葉か底の花のひとと

谷残花

426 山深く残るとみせてたえくに花を流せる谷川の水

┌
(ウ)

┌
(34・オ)

┌
(35・オ)

川款冬

390 いかたしのさす手や匂ふ吉野川岸の山吹花も乱れて

391 山川の浪にも春の色くれてたえくうつる山吹のはな

宇治川にて

392 みなかみの岸の山吹咲ぬらし花おりそふる宇治の柴舟

393 花にさく山吹の瀬の春風に末さへにほふ宇治の河浪

磐手の里にて 垣根の款冬の咲つゝけるを見て

394 里の名はいはてもしるし口なしの色にかこへる山吹の花

垣款冬

395 入日かけうつる垣ねに山吹の花も光をそふるゆふはへ

396 ゆく春のなこりをこめてさく花の八重垣つくる庭の山吹

藤

397 色かへぬ松の木末にいく千世の春をかけてかにはふ藤浪

雨中藤花 飛鳥井卿月次御題の中

398 おる袖もぬれてそかほる雨の中に色そふ藤の花の下露

399 さく藤の色に軒端はうつもれて花よりそく庭の春雨

百首哥の中に 杜藤

400 春は名にあらはれてさく藤の杜こそ花の色にうもれて

藤の杜にて 藤の花の盛に咲けるを見て

401 神垣に咲そふ花の藤のもり色のゆかりも人さそふらん

大坂にて 野田の杜の藤の花見にまかりて

402 むらさきの色をゆかりに藤浪のたまくおしき杜の下陰

暮春

403 くれにけり散しく花の早瀬川かへらぬ波に春もなかれて

404 今とはとて鳥もふるすやたのむらん花もとまらぬ春の別に

春の暮によめる

405 とまらぬ春のなこりやさそふらん花ちる山の有明の月

暮春月

406 春の色も残りすくなくちる花の木末に霞む有明の月

暮春雲

407 行春の有あけの月にうらむなり花のかたみの嶺の白雲

408 くれてゆく春の名残も立そひて入日を急く山端の雲

春の暮に 嵯峨の法輪寺にまかりて

409 花さそふ嵐の山のふもと寺入相のかねに春もくれ行

花月雪三十首哥の中に

410 さそひゆく嵐の外もうらむなり花にうつろふ春の日数を

春の末つ方志賀にまかりけるに 花も散過たりしかは

411 ちれは又人目もたえて行春のふる郷さひし志賀の花園

春そ少き 飛鳥井卿句題三十首の中

412 花鳥の色音も今はたえく春そすくなき山陰の庭

413 とにかくに春そすくなき花鳥のおしむ色音も今はとまらて

暮春鶯

「ウ」

「(33・オ)」

- 367 夕燕
家鳩もねくらに帰る夕くれの軒につはめのやとりとふこゑ
摘葶
- 368 野へにちる花のしら雪ふみ分て若菜の後の葶をそつむ
摘袖も露けかりけり葶草野となる里の春のかたみに
- 369 故郷葶
あれはてしたかふる郷のすみれ草残るゆかりの色も少き
- 370 梨花
さくら花ちりにし跡もしら雪の色に匂へる軒の山なし
- 371 池杜若
池水の深きを色のかきつはた底にも花の影はへたてす
- 372 住吉の浅沢にて 杜若を見て
杜若かけもつみかうつれは深きむらさきを深むるの色になかる浅沢のみつ
- 373 春田
石上ふるのあら田もさらにまた打かへしてや春にあふらむ
- 374 春歌の中に
こかくれの山下水もあらはれつ苗代小田の春にひかれて
- 375 苗代
せく人のいとまも見えて春雨の恵はふかきなはしろの水
- 376 苗代水
春深くせくや門田の柳かけ苗代水もみとりそふらむ
- 377 吉野川岸根の浪の早き瀬に影さへなひく山吹の花
- 378 山水の浮草なからせきいれて緑なみよる小田のなはしろ
雨後苗代
- 379 雨はる、苗代垣の露ちりてあせこす浪に春風そふく
躑躅
- 380 何をさは忍ふの岡のいはつ、しいはて千人の色にいつらむ
咲にけり竜田の岸の岩つ、し秋の紅葉のを花にうつして
- 381 岡躑躅
紅ゐの入日の岡の下つ、し千人の上をそむるひとしほ
- 382 白つ、し
雪の色の深きやいつれしらつ、しさくや桜の花の木陰に
- 383 蛙
行春のあはれそ浮ふ山吹の花ちる水にかはつなくこゑ
- 384 夕蛙
雨くらき沢田の蛙はるくとなくねもかすむ山のゆふ陰
- 385 田蛙
水ほそきあら田の蛙打わひて霞にむせふ夕くれの声
- 386 池蛙 月次三首歌の中
春雨のなこりの露の浮草に蛙なきよる池のさ、波
- 387 匂ひなきこゑともいはし山吹の花の底なる池の蛙は
- 388 款冬
- 389 吉野川岸根の浪の早き瀬に影さへなひく山吹の花

花形見

- 345 風ふけはそれも跡なくちる花のかたみあたなる嶺の白雲
 雨ふり風吹出ける日 花のちりけるを見て
 ちり初る桜かえたの春雨に花のみそれをさそふ山かせ
 雨中落花
- 347 ふる雨に流もやらす散しきて庭にかたよる花のしら浪
 北山の花見にまかるへきなと藤原清方に申かはしけるに 其
 日いたう雨ふりてほるとけさりければ 読て遣しける
 降雨に人のこゝろもうつろひぬしめし山辺の花や散らん
 嵐山にて 花の散けるを見て
 (29・オ)
- 349 山の名の嵐のとかになしはてんちるをならひの花のつらさも
 よそよりもちるをや急く花心その名もゆき山の嵐に
 阿多大野にて 花の散ければ
- 351 色も香もあたの大野のさくら花人こそとはね春風そふく
 大井川にて花の散しける折 筏をくたすを見て
- 352 大井川くたす浪間のいかたしや散しく花を又ちらすらむ
 立田川に 花の散しきけるを見て
- 353 是も又渡らはたえんたつ田川風のかけたる花の浮はし
 飛鳥川に 花の流るゝを見て
- 354 飛鳥川浅瀬の浪に散しきて花や匂ひの淵をせくらん
 瀧落花
- 355 みなかみの花や散らん春風に数かけそふる瀧のしら糸
 花月雪三十首哥の中に
 (ウ)
- 356 ちれはかつさそふと見えし山水もはてはせかるゝ花のしからみ
 三月三日に 曲水宴の心を
- 357 さかつきの流れてめくる石間さへゑひの色そふ花の下水
 雉
- 358 月は猶霞みて残る山かけにはねうつきしの声そあけ行
 春哥の中に
- 359 霞たつ外山の桜ほのくとあけゆく月にきゝすなく也
 岡雉子
- 360 花の色は霞む岡辺にたつきしの声よりしらむ曙の空
 夕霞へたゝる妻やしたふらん入日の岡にきゝすなく声
 野雉子
- 362 みかりせしかた野の雪の跡とへはちりかふ花に雉子鳴なり
 朝雲雀
 (30・オ)
- 363 朝さえの野へに日影や急くらん芝生のひはり声も霞みて
 燕
- 364 鳥すらも忘れぬ道かつはくらめなれし軒端のものとの契は
 雨中燕
- 365 春雨のふるき軒端のつはくらめつはさも濡てやとりをそとふ
 軒近くやとると見れば春雨の空につはめの又かすみゆく
- 366

- 321 立かへりあすもきて見ん桜戸の春のあるしを花に契りて
花主
- 322 嵐のみあたにこと、ふ山里の花のあるしは人もまたれす
閑居花
- 323 とちはつる蓬か庭の桜花とはれぬ春の色もさひしき
- 324 とはれしの宿にはおしき盛かな律に余る花のほひも
百首歌の中に 閑中花
- 325 人とはぬ我をや花のかこつらん色香あたる庭の春風
庭の花咲ける比 友とちの許に申遣はしける
- 326 哀しる人はとひこて色も香もひとりにおしき花のゆふはへ
庭の花御覧せんとて 公貴典いらせ給へる時 見花と云事を人
さよみけるに 「ウ」
- 327 言の葉の花も数そふ家桜とはる、けふをさかりとや見ん
藤原親備か庭の花咲出ける比
とへかしな律の庭のいふせきも春はひと木の花をあるしに
と申贈りければ かへし
- 328 色も香も深き情にとひよらん契る言葉の花の下かけ
花有遅速
- 329 あかなくにまつちりそめしつらさまでをくる、花の名残とそなる
花哥の中に
- 330 染はてし心の色や恨みましあかてうつろふ花のなこりに

- 331 色も香もあはれあたる盛かな花にうき世の雨風の空
落花
- 332 心からちる名もおしき桜花なか／＼さそへ春のやまかせ
吹さそふ嵐のとかのなかりせは散ゆくうさや花にまさらん
さそはれてちるもはかなき花心行ゑためぬみねの嵐に
吹おろす嵐の末も霞む也花上の花のちりみたれきて連山山はあはれさくら今あはれちるらし
韻歌百首よみける中に
- 333 春霞色かはるなり山風のたつ田のさくら今かうつろふ
ちる花のしはしは匂ふ木のもとに猶残さしと春風そふく
落花風
- 334 たか袖も同じなこりに匂ふらん桜ちりかふ四方の春かせ
落花随風
- 335 心なき風の行ゑにさそはれてちりかふ花はねにもかへらす
木のもととはつもりもあへす春風の行ゑにきゆる花のしら雪
花月五十首歌の中に 花似雪
- 336 ちるたひに同じ木陰の色そへてよそにつもらぬ花の白雪
吉野山にて 花のちりける時
- 337 みよしの、嵐は袖にさむからて雪わけまよふ花の下道
月前落花
- 338 山高み散かふ花のなこりまでひとつにかすむ有明の月
春風の霞を払ふ山のはもあまざる花にくもる月かけ

- 308 咲おほふ花に軒端はうつもれて雲の林の名こそかくれね
- 307 鐘の音は霞の奥にあげやられて花よりしらむ小初瀬の山
雲林院にて 花の咲けるを見て
- 306 桜つむ山路の桜さきしより苔の袂も香に匂ふらん
花月五十首哥に 同し心を
- 305 明わたるよ川のみねのほのくくと八重立まよふ花の白雲
古寺花 飛鳥井卿月次御題の中
- 304 いく春もつきぬ恵を神垣の花のゆふしてかけてたのまん
吉野にて 四手掛明神の社にて花を見て
- 303 千早ふる神垣山の春風にみたれてかゝる花のしらゆふ
名所哥の中に 神垣山
- 302 春風もぬさとちらすな神垣の手向ににほふ花の木末は
杜頭花
- 301 枝かはす磯山松も花の色にかすみて匂ふ春のうらかせ
鹿兒島の磯の花見にまかりける時
- 300 磯山の花の下風吹にけり浦の苦屋も香に匂ふまで
磯山の花よりかきて
ゆく舟のまほに匂ひや余あゆん花よりすくも春のうら風
- 299 海辺花
- 298 鳩の海やしらゆふ花の浪の上も桜に匂ふ志賀の浦風
花月五十首の中に 湖上花
- 297 ちらぬまもきしねの桜影落て河瀬の浪の花に立そふ
花月五十首の中に 湖上花

「
(26・オ)

「
(ウ)

- 320 川上親盈か山荘に 花見にまかりて
- 319 さすか又契らぬ人もまたれけり花をあるしの柴の戸の春
咲おほふ山さくら戸の明くれも花にこもれる春そしつけき
- 318 山里にさかほといひし人はこて花にことゝふみねのまつかせ
同し心を 中神長皎家会
- 317 こてふさへもり捨にけり花の色もあたなる夢の世々のふる郷
山家花
句題三十首哥中に 萎花蝶飛去
- 316 人とはぬ春をうらむかふる郷に残る老木の花も露けき
花月五十首哥の中に 同し心を
- 315 鶯のやとりあらさぬ花の色もあはれ老木の世々の故郷
故郷花
- 314 ふり残る花もすくなし浅茅原野となる里の春のかたみに
へたてなき匂ひや人をさそふらん花にかこへる里の中垣
- 313 すむ人の心の花もにほふらむ桜にかこふ山もとのさと
禁中花
- 312 立並ふいづくもあらし九重の花の雲井の深き色香は
名所のさかりはあれと
立並ふいづくもあらし九重の花の雲井の深き色香は
里花
- 311 百首哥よみける中に 禁中花
- 310 さかりなる野寺の花のちらてしもくるゝにおしき入相の声
ある山寺にて 花の盛なるを見て
- 309 山寺の花は盛の色見えて入相のかねにちるとしもなき

「
(27・オ)

「
(ウ)

花月雪三十首哥の中に

275 春といへはかすみにけりな月影もさやけきを花にゆつりて

寄雲花

276 いささらはまかひもはてよみねの雲花のたえまの見えぬはかりに

「(24・オ)

277 咲つゝく色を深めて山のはの花のとたえにかゝるしらくも

花似雲

278 しら雲も立まかひけり山さくら花より花の色を重ねて

花の所は 飛鳥井卿句題三十首の中

279 白雲のかさなる山の奥までも花のところはわけいりて見ん

住吉社に十首哥奉りける時 山花

280 朝日かけうつろふ雲もさく花のうすくれなるに匂ふ山のは

暮山花

281 よそよりもくるゝは遅き山路かなかすみもはてぬ花の光に

282 花の色もひとつにかすむ白雲の夕ある山に匂ふ春かせ

花月五十首の中に 深山花

283 さそひくる風の匂ひをしをりにてしらぬ深山も花にまよはず

吉野山の花見にまかりける道にて

284 匂ひくる嵐を花のしるへにてゆくすゑうつむ八重のしら雲

吉野山の花の盛なるを見て

285 しら雲のはてなき色にうつもれて花の底なるみよしの、山

「(ウ)

286 花ならぬしら雲もなしみよし野の山は桜を面影にして

初瀬山の花の盛なるをみて

287 はつせ山ひはらか上もさく花の色に立そふ八重の白くも

288 立つゝく桧原か上のしら雲も花になりゆく小初瀬の山

御舟山に花の咲けるを見て

289 吹渡るみふねの山の春風にみたれてさはく花のしら浪

鈴鹿山にて花を見て

290 くれ近くなりける哉鈴鹿山ふり捨かたき花のなこりに

名所五十首哥の中に 葛城山

291 青柳のかつらき山のみねの雲なひくもかほる花の春風

青根か嶺に 花の咲出けるを見て

292 名にしおふ青根かみねもさく花のむら此は春にいちとる花のしら雲

谷花

293 鶯のふるすの谷のさくら花あたなる春を誰にさくらむ

花月五十首哥に 古溪花

294 光なき谷にふりぬる埋木も咲そふ花に春をしるらし

開花

295 さく花の盛になるや鈴鹿山関もる袖も香に匂ふまで

吉野山にて 関屋の花とかやなつけし一木を見て

296 見る人のさすか過うき色に香に花や関屋の名をと、むらん

河辺花

「(25・オ)

- 251 さき初る色香も深し庭桜花のみやこの春をうつして
花盛
- 252 こゝろさへちらてそむかふ春風も治まれる世の花のさかりは
花久盛 飛鳥井卿月次御題の中
- 253 ふく風もならさぬ枝にさく花の長ささかりも世の恵なる
長閑なる春やうれしき花心ちらていくかの盛見すらむ
磯山の花盛見にまかりける時
「ウ」
- 254 いつれにかこゝろと、めん色も香も千本にあまる花の下かけ
静見花 松元武安家会
- 255 のとかにもむかふ軒端の山さくらこゝろの花に風もさはかす
遠見花
- 256 よそ目にもへたてぬ色や山本にかすみのこせる花のひとつ
毎春翫花
- 257 春ことにあたなる色をかこちても心にいかて花に染らむ
折花
- 258 つらしともおもひなはてそ山桜たをるは花にあかぬこゝろを
山さくらた、なをさりの家つとにおる手や花の嵐なるらむ
ふく風をいとひて手をる桜はなこゝろなき名はさもあらはなれ
花月雪三十首哥の中に
- 259 心あれやまた見ぬ人をかことにて手折るはゆるす花の山守
庭の花見給はんとて末川周山君いらせたまひける そのあけ
「(23:オ)」
- 262 263 の日に一枝を折て添て奉りける
たか為にけふはおしまん家桜たをれる花よちるまでも見
御かへし 周山君
- 264 心ありてたをるさくらはちるとも残る詞の花そにほはん
句題三十首哥の中に 花時心不閑
- 265 咲をまち散をおしみて春はた、花になくさむ心ともなし
夜思花
- 266 あかさりしけふの山路の花の色をよるの心につつしてそ見る
野へに見し花の色香も深きよの心にのこる今日のおもかけ
たつね見んあすの山路を思ふかな花さく比の夜半の寐覚に
暁花
- 267 霞たつ遠山かつらほのくと花の光そあけはなれゆく
朝花 飛鳥井卿月次御題の中
「ウ」
- 268 出る日も光やにほふ朝なくとみねに立そふ花のしら雲
あさなくと峯にわかる、しら雲のはれぬにしるし花の盛は
夕花
- 269 とふ鳥の帰る羽風も匂ふらむ花さく山のゆふくれの空
花下日暮と云事を
- 270 夕月も待出て見ん山さくらななき日あかぬ花の木かけに
月前花
- 271 風かほる梢の月はさやかかにて軒端の桜花もかすます
「(23:オ)」
- 272 273 274

- 239 花
 のとかにも春の錦ををりはへて柳桜のいともみたれす
- 238 237
 花の色も咲そひぬらし家桜雨の恵のけふをまちえて
 春雨の露も玉ぬく糸さくら木末の花の光をそそふ
 同し糸桜の咲出けるに 柳の立ましりたるを見て
- 236 235
 あすも又とひよりて見ん糸さくらくるゝにあかぬ花の木陰は
 同し庭の花御覧せんとて 公のいらせ給ひけるに 其日雨の
 ふりければ
- 234
 佐保姫のこれや手染の糸桜花の錦のなひく木末は
 藤原親敬か庭なる糸桜の花咲ける時 見□まかりて
 春の日の長にくもなひく糸桜たえすか花を立よりて見んいくよか咲匂はなんはなん
- 233
 見る人のたをらぬ春に匂ひきて若木の桜幾世へぬらん
 糸桜
 ー
 (21・オ)
- 232
 たか為にふり残るらん八重桜ならの都の世々の春かせ
 須磨の福祥寺の庭に 若木の桜といひ伝へてひともの花盛
 なるに 一枝をさらは一指を切へし となん制札のたてりけ
 るを見て
- 231 230
 立まかふ雲も霞もみよしの、桜にもる、色やなからむ
 奈良の東円堂とかやいへるあたりに 一木の八重桜の咲出た
 りけるを見て
- 249 248
 けふよりは心の色もそへて見んまつ咲そむる花の木すゑに
 日にそひて花になりゆく心かな軒端の桜咲そむるころ
 平佐のあるし北郷久珉君の庭に 近衛左府公よりたまはせし
 桜のひと木を移しうへられしか 此春初て花咲ぬる事を歎ひ
 庭花初開といへる題をこゝらの人々にあたへて 歌よませ給
 ひける時 よみて奉りける
- 247
 しら雲の深き山路にとひわひぬ分こし花は風も匂はて
 初花
- 246
 とひ残す花のよそ目に迷ふかなわけこし跡のみねのしら雲
 遠尋花
- 245
 春浅き雪の木末の山かせにやかてにははん花そまたる、
 尋花
- 244 243
 咲ぬまのつらさにそへておしむ哉花にすくなき春の日数を
今はや、まつに日かおも
 まつ程の日数も今はうつりきて心に匂ふ花のおもかけ
 花月五十首哥の中に 初春待花
- 242
 色にそむ春のこゝろの怠りもちりなん後や花にうら見ん
 待花
- 241 240
 咲をまち散をおしめる心より春の日数そ花にすくなき
 鹿兒島住吉奉納哥の中に 花
 ー
 (ウ)
- 250
 咲そひて千世もかさねんこゝのへの春をうつせる庭の初花
 ひける時 よみて奉りける
- ー
 (22・オ)

- 206 かはしける
よしさらは花まつ程のなくさめにはれぬ日数もなかめくらさん
- 207 夕春雨
さひしさもしのふにたへぬゆふへ哉ふるき軒端の春雨のそら
- 208 夜春雨
明る夜を花にそいそく初桜さくらん比の庭の春雨
- 209 袖の上もしつくそたえぬ春雨のふるきを忍ふ夜半のね覚は
- 伊勢にて春雨のふりける日 涙川を渡りけるに みなかみなる山を袖岡となん人の申ければ
- 210 涙川流れそまさる佐保ひめの袖岡山の春雨のころ
庭春雨
- 211 ふるとしも苔の雫にしられけり霞みてくる、春雨の庭
春駒 百首哥の中に
「ウ」
- 212 山桜ちりかふ野へに立ならし花のふ、きにいさむ春こま
- 213 春深く霞む沢辺に朧なる月毛の駒の影もと、めす
野春駒
- 214 はるくと行多もきえて春の野の霞にかけるひはりけの駒
- 215 春風に声も匂ひてさくら花咲そふ野へに駒いさむなり
沢春駒
- 216 むれてたつ野沢の春の雨の中にぬれつ、あさる青鷺の駒
帰鷹 松元武安家会
- 217 有明のつれなく見えて行鷹も春の別やうしとなくらん
- 218 今はとて花ちる里をたつ鷹は越路の春やおもひ出らむ
- 219 故郷の契もさすかつらからん花に別る、春のかりかね
伊勢太神宮に五十首哥奉りける時 帰鷹
- 220 忘るなよ花にわかる、鷹かねも月にたのむの秋の契を
霞中帰鷹
「(20-オ)」
- 221 心あてにしはしは見えてゆく鷹の声もほのかに霞む空哉
夕帰鷹
- 222 行鷹も花さく山の夕月夜さすかいまはのなこりやはなき
夜帰鷹
- 223 かへる鷹別る、夜半の月影に又こん秋をちきりてやなく
- 224 おもひたつなこりやさすか深き夜の月に別れて厂の鳴らん
帰鷹遥
- 225 空遠く見送る声のしるへさへやかて跡なくかへる鷹かね
桜
- 226 あくかる、心もつらし山桜さかり程なき花のうき世に
- 227 立まかふあしたの雲のむら／＼にあらはれてさく山桜かな
山桜
「ウ」
- 228 立ならふ尾上の松の隙ことにさくらをわけてか、るしら雲
吉野桜 飛鳥井卿月次御題の中
- 229 みよしの、みねもふとも立つ、くさくらくいく木の花の白雲

春月朧

182 かくてこそ春のあはれも立そひぬ中々霞め朧夜の月

月のいと朧なりける時

183 おほろなる桜か枝の春の月光をそへて見る花もかな

春暁月

184 春のよの名残も深く立そひて霞にしらむ有明の月

深夜春月

185 山のはのつらさも見えすふくるよの霞の底に有明の月

山春月

186 白妙の花のこのまにあらはれてかすみもあへぬ山端の月

散まよふ木末の花を吹かけて嵐にかすみ山のはの月

春夜 奈良にて月を見て

188 ふる郷のかたみをとへは三笠山春やむかしとかすみ月影

河上春月

189 橋姫の袖には楯や霞むらむ身をうち川の春のよの月

海辺春月

190 花もなき浦の菅屋の夜半の月霞みて春の色をそふらん

心なき烟をそへて塩かまのうらみもふかく霞む月かけ

浦春月

192 影うつす波の烟もくもりそふ霞の浦のはるのよのつき

春曙

193 春よた、匂ふ心の花もなしよもきむくらの宿の明仄

194 打かすむ千里の外のはれまて心にこもる春の明ほの

195 春の夢さそはれやすき匂ひかな梅さく窓の明仄の空

196 うくひすもねくらなからの声すなり花の陰なる宿の曙

山春曙

197 山深き霞の奥もほのくと花にあげゆくみよしの、春

198 明るよの花の光はほのかにて霞そ匂ふ山端のそら

河春曙

199 水無瀬川春のあはれも立そひて山もと遠く霞む明ほの

海辺春曙

200 与謝の浦や霞の波の明ほのにあらはれ渡る天のはし立

坊の津にて 春曙のけしきいとをかしかりければ

201 飛鳥の色音の外の春ならん浦風霞む浪のあけほの

春朝 飛鳥井卿月次御題の中

202 いく人の哀をこめて霞むらむ花鶯の春の朝あしたはあけ

203 花鳥にまつさそはるゝこゝろかなのとかに明るこすのとの山

春雨

204 なへて世にもれぬ恵やたのむらん民の草葉のはる雨の空

205 寒からぬ風やみそれをさそふらん花ちる比の木々の春雨

春雨の降つ、きける比 或人の許より雨の中のつれつれなる

はいと、くらしわひぬるなど申贈りければ よみて」

(19・オ)

つ

「
(18・オ)

「
(ウ)

「
(ウ)

159 水清き池のかゝみに青柳の打たれ髪や影うつすらむ

江畔柳

160 あまのすむ入江の村の夕烟なひくも深し青柳の陰

梅柳度江春と云事を

161 風さそふ梅の匂ひの深き江におなし春なる岸の青柳

百首哥の中に 渡柳

162 高瀬さす淀のわたりの朝風にみたれて霞む青柳の糸

六田の渡にて柳の老木を見て

163 くりかへし幾世の春に霞むらんむつ田の淀の青柳の糸

猿沢の池の堤に うねめかきぬかけの柳とかやいひ伝ふる一

木の有けるを見て わきも子かねくたれ髪を猿沢の となん

よみ給ひしふる事とも思ひ出られて

164 わきも子かねくたれ髪のおもかけも老木に残る青柳の糸

行路柳

165 いく人の別の道に手折きて老木の柳なこりをかする

若草 福島行通家会

166 冬かれし霜の花野の色かへて緑にかすむ春の若草

167 枯はてし垣ほの霜の下草も春のめくみの色はへたてす

百首哥中に 春草

168 ふる雨の恵をさしたのむらししめちか原の春の若草

水辺春草生

169 池水のみとりも日々に増るらん下もえわたる芦の若葉に

韻歌百首よみける中に

170 霜かれし跡とも見えす春雨の恵にもれぬ宿の道芝

名所五十首哥の中に 宇津山

171 帰るさは紅葉やわけんうつの山春はみとりのつたの細道

早蕨

172 岩つゝし咲る岡辺の下わらひ花にもゆる色は見えけり

折蕨

173 おる袖に花の雫も匂ふなりさくら咲そふ野辺のさわらひ

174 散かゝる谷の桜の下わらひおる手に花の雪やはらはん

野への蕨を折て末川周山君に奉りける時

175 山里の春のけしきも思ひやれ折しりかほの野への早蕨

遊糸

176 やきすてし春の野末にくり出て烟をのこす空のいとゆふ

177 一筋にあるにもあらずその原やふせ屋の野へに遊ぶ糸ゆふ

遅日

178 よそよりもくらすやいと、遅からん花なき里の春の日かけは

春月

179 軒端なる花にははれよ夜半の月霞むを春の光ながらも

180 かきくらし花ちる軒の春の月かすむか上に猶霞むなり

181 深き夜の梅か香なからうつりきて枕に霞む窓の月影

136 軒端なる梅のはつ花咲ぬらし木末の雪に匂ふ朝かせ

いつれを梅と 飛鳥井卿句題三十首の中

137 鶯もいつれを梅とたとるらし花さく枝の春のあは雪

曙梅

138 うくひすの声の匂ひもあらはれて梅かえしらむ窓の明ほの

夜梅

139 風かよふ枕の夢の跡とへは梅か香なからかすむ月かけ

140 窓近き梅の下かせ吹ぬらし匂ひにさむる春のよの夢

旅宿梅

141 宿りとふ野中の里にさく梅の花にかりねの夢やむすはん

142 旅枕花にやからん山もとの梅か、ふかさゆふ暮のやと

山路梅花

143 雪深き山路の春に咲いて、しつや折しる梅のはつ花

梅久薫 高雲堂御会

144 難波津の詞の花も世々かけてつきぬ匂ひや梅の春風

145 はる風ものとかなる世にさく梅の花や千年の香に匂はなん

梅薫袖 林館御当座

146 月影はかすみはてたる軒端よりうつすにあかぬ袖の梅か、

梅薫暁袖

147 おると見し夢のなこりも深きよのうつ、にかよふ袖の梅か、

紅梅

148 をく露も花の千入に染られつ夕日照そふ梅の木末は

149 紅葉の千入の秋のおもかけも花にうつろふ春の梅か枝

梅花の散ける頃

150 梅の花散かふ軒の春かせにみたれてかほる庭のしら雪

落梅浮水

151 ちる梅の匂ひにひたす袂かな花の浪せく山のした水

柳

152 吹ぬまも風を心にをく露のこほれてなひく青柳の糸

柳竹春色 飛鳥井卿月次御題の中

153 緑なる色を花田の糸柳かすみにそむる春のはつしほ

154 浅みとり染る柳のいとはやも花より先の春や見すらん

柳無気力

155 さ、かにのはかなき糸をかけてさへえたまつ動く春の青柳

柳露 福島行通家会

△ ぬきみたる露の玉のを打はへて光もなひく青柳のいと

156 青柳の花田の糸のくりかへしみたれて染る春の朝露

水辺古柳

157 年月もうつる河辺のふし柳もとのみとりのかけそ少き

池柳

△ 158 きしねより緑をそめて池水の玉もにつ、く青柳の糸

水の面はふくとも見えず青柳の小枝によはき池の春かせ

115 もえ出る若菜やいつことふひ野の春風さえて淡雪そふる
「(ウ)

春雪似花

116 かきくらし散かふ花も庭の面に消てにはほぬ春の淡雪

春雪のふりける時

117 とへかしと誰に契らん程もなしきゆるをいそく庭の淡雪

余寒風

118 梅か香は春に匂へる軒端より雪をさそひてさゆる朝かせ

消かての雪の下水猶さえて氷にかへる谷のはる風

余寒雪

120 花はまた匂はぬ比の春風に朝気をさむみふれるしら雪

余寒に霰のふりける時

121 青柳の糸に玉ぬく露ならて音もあられのさゆる春風

梅

122 里人のゆき、の袖も此比は梅か香ならぬ春風もなし

123 たか里にまつさそはれん梅か、の方も定めす匂ふ春かせ

梅風

124 春風のかかするへにかさそふらんぬし定まらぬよその梅か、

梅薫風

125 春風のふくとはしるし山本の霞をもる、梅のほひに

126 此頃は花に匂はぬ里もなし梅盛なるよもの春かせ

伊勢太神宮に五十首哥奉りける時 同し心を

127 心さへよその匂ひにさそはれて行ゑもしらぬ梅の下風

庭の梅の花盛なる比 大伴兼頭に申遣はしける

128 香をとめてとへかし人の梅の花風の心にかてまかせん

かへし

兼頭

129 さく花の匂ひはよそにをくる共ちらしなはてそ梅の下かせ

春の初つ方難波にまかりける時 一木の梅の花盛「ウ」なる

に 井垣ゆひめくらしてよしはみたるを人にとへは 古へ咲

や此花とよみたりしなこりとなん答へければ 取あへず

130 いにしへの言葉の花の匂ひまでさそふなにはの梅の下風

生田の杜にまかりけるに 簾の梅といひ伝ふる一木有 是な

ん昔梶原景季か此あたりにてほまれを得たりし花 えひらの

梅のふる跡を残せるにこそ と人の申ければ

131 梓弓春さく梅の花えひらその名も世々に猶匂ふなり

高岡の香積寺にて 月知梅となつけし一木を見て

132 色にそむ人の心も梅かえの花にこと、ふ月やしるらむ

月前梅

133 さく花の色はひとつにかすむよの軒端の月に梅の香そする
「(14・オ)

134 もる月の影こそにはへ梅かえの花の光はかすむ軒端に

句題三十首の中に 清月上梅花

135 梅かえのさやけき花にうつりきて霞みもあへぬ窓の月影

雪中梅

- 92 打とくる雪まの声も初草のまたうらわかき野辺の鶯
 松上鶯 飛鳥井卿御会始の御題 文政三年辰
- 93 けふよりははつねを共に急くらん小松か原の春のうくひす
 子日 〔11・ウ〕
- 94 二葉なる松に契りていく千世もよはひをのへの子日してまし
 山居子日
- 95 ならはしにひくや二葉の松の戸もさすかはつねのけふを覚えて
 ひかれこし山路の去年の今日の友又もはつねのまつとしらせん
 子日に 松元武安 野への逍遙せし家つとなりとて 小松の
 一もとを贈りければ よみて遣はしける
- 96 子日せし小松の露の恵には心をへの春も見えけり
 いく春もかれぬねの日の姫小松うへて千年の陰や契らん
 若菜
- 99 雪さえぬ野守か庵の通路もたれ分そめてわかな摘らむ
 打払ふ袖の雫も猶寒し若菜つむ野の春の朝霜
 伊勢太神宮に五十首哥奉りける時 摘若菜
- 101 子日せし小松か原の跡とめてけふは二葉のわかなをそつむ 〔ウ〕
 若菜知時 福島行通家会
- 102 氷とく山下水にもえ出て若菜も春のめくみをやしる
 雪中若菜
- 103 ほとけのわかなをれども見えすかき分て雪を手につむ萩のやけ原
 〔11・ウ〕
- 104 消あへぬ野原の雪に白妙の袖をかさねて若菜つむなり
 雪間をわけて 飛鳥井卿句題三十首の中
- 105 春もまた浅沢小野の初若菜雪間をわけてつむも少し
 野若菜
- 106 若菜つむ跡もすくなし白雪のふるさと寒き春日野の原
 田若菜
- 107 いく千世の春もつまなん呉竹のふしみの小田におふるわかなは
 わかなつむ田井のさ、水猶さえて袖の雫に春風そふく
 福島行正か許より若菜にそへて 〔12・ウ〕
- 108 長閑なる田面の春の初若菜千世つむ宿のためしとも見よ
 と申遣はしければ かへし
- 109 長閑なる田面の若菜つむ人の袖にも千世の春やこまれる
 残雪
- 110 春の日の影や太山にへたつらん霞の奥に残るしら雪
 咲ぬまは花のゆかりとみねの雪残るは去年のかたみのみかは
 谷残雪
- 111 もりかぬる春の光や忍ふらん猶雪深き谷のかけ草
 百首哥中に 春雪
- 112 霞たつ空に日影はへたて、もこ、ろと消る春のあは雪
 野春雪
- 113 春きても猶ふる年のおもかけに雪そちりかふまの、かや原

- 69 里霞
 烟たつ里より里の朝霞ふかくも春の色になりゆく
 遠村霞
- 70 一むらのけふりの末もほのくと霞みてあくる岡の辺の里
 あけ渡る水の烟も立そひてかすむそ遠き河つらのさと
 水郷春望といふ事を
- 71 明わたる岸の柳も打けふり霞になひく淀の河かせ
 鶯
- 72 春きても花の香遅き山風にまつさはる、うくひすの声
 なく声の匂ひや人をさそふらん花まつ比の木、のうくひす
 韻歌百首よみける中に
- 73 鶯のなくねもさそへ谷の戸のみ雪吹とく春のはつかせ
 春来鶯遅
- 74 春きても雪の花さく梅かえに猶うくひすの声は匂はず
 鶯知春 月次三首哥に
- 75 雪寒き谷の心も鶯のはつねに今朝の春やしるらむ
 暁鶯
- 76 花の色もほのかに明る谷の戸の霞をもる、鶯のこゑ
 梅かえの花もしらみて明る夜のねくらはなる、鶯の声
 朝鶯
- 77 夜をこむる霞の奥の山もとに明はなれゆく鶯のこゑ
 〔10・オ〕
- 80 春寒きねくらの竹の朝霜に月影や急くうくひすの声
 夕鶯
- 81 花の色はや、くれそめて山もとの霞に残るうくひすのこゑ
 韻歌百首の中に
- 82 夕はへの花の色香にうかれてや疇定めぬ園のうくひす
 雪中鶯
- 83 鶯のやと、ふ声は春なからまたきえあへぬ雪のむら竹
 なくこゑもまた解やらぬ雪の中に羽風やさむき谷の鶯
 春哥の中に
- 84 とけやらぬ涙のつら、春さえてなくねもむせふ谷の鶯
 谷鶯
- 85 へたてなき春の光を待得てや涙とくらん谷のうくひす
 鶯出谷
- 86 埋木の谷の心をよそに見て春のひかりにいつるうくひす
 岩浪の氷とけゆく春風にはつね打いつる谷のうくひす
 大和にまかりける時 談武峯にて鶯のなくを聞て
- 87 なかなくにきくものどけし春の色をかたらひ山の鶯のこゑ
 きさらきはかり霧島山に登りける時 鶯のわつかに鳴けるを
 き、て
- 88 鶯の声やみ山の春ならん雫もさむき楨の下かせ
 野鶯
- 89
- 90
- 91

朝霞

46 朝日かけうつろふ方はほの見えて霞にきゆる嶺のまつ原

山霞

47 雪の色に目馴し山もまのふりけふはいつしかと霞をにけりな遠さかりゆく

48 佐保姫の霞の袖や薄からんつゝ、みかねたる遠の山眉

49 しら雪のふるき都も春きぬとかすみそめたるみよしの、山

句題哥の中に 晚霞隔旅山

50 宿りとふ里のしるへの烟さへ霞にまよゆふくれの山

妹背山の霞めるを見て

51 たか中の思ひの末といもせ山霞の袖も立へたつらむ

鏡山の遙に霞ければ

52 むかひ見る山は鏡の名のみして霞の底に曇る面影

三輪にまかりける道にて

53 卷向のゆつきか嶽はあらはれて霞にしつむみわの山本

鈴鹿山を越ける時

54 行末はたかのる駒の鈴か山ふかくもかすむ関の下みち

橋霞

55 水けふりや、立そひてあくるよの霞にわたす宇治の川橋

長柄の橋のふる跡にて

56 橋柱くちにし跡も春霞むかしなからに立わたるらん

野霞

57 妻こひの思ひや深く立こめてき、すなく野のけさ霞むらん

野径霞

58 打渡す袖のけしきもはるくと春に霞める野への通路

海上霞

59 雲の波烟の波もはてそなき千重にかすめる八重の塩路は

60 海原は空もひとつにうつもれて霞をわたる春のうら舟

海辺霞

61 夕月夜かけの湊をこく舟の音さへ。遠くかすむ。浦浪の上かな

浦霞

62 もしほやく烟をそへて浦人の管屋の軒や猶霞むらむ

春の頃 須磨の浦にて

63 すまの海や名におふ月のおもかけもとはしな霞む春の浦浪

島霞

64 波の上は霞の色もうつもれて空にそうかふ沖の遠しま

百首哥よみける中に 湖霞

65 鴉の海や塩干はしらぬ汀より霞の波そ遠さかり行

霞隔舟

66 梶の音は戸渡る浪に残りけりおほふ霞の袖のうら舟

霞隔遠樹 堀起護家会

67 雪の色をよそにへたて、み山木の梢や春に霞み行らん

68 雪きえぬ尾上の松の一村も霞を色に立へたつらむ

23 雪の中に春の日数もあらはれてかつくにほふ窓の梅か、

初春祝

24 松の葉のへたてぬ色にたか門も同じ千年の春や立らん

25 万代の声も八隅にやはらくやとよ芦原の春の初風

元日によめる

26 なへて世の人の心もことの葉もけふあらたまる春はきにけり

試筆

27 けふといへは明ゆく空ののとかにも見ゆるや春の心なるらん

28 こゝろさへあらたまりけりあらたまの年立帰るけふを迎へて

飛鳥井大納言の御許より御会始の御題賜はりける時

貴賤迎春

29 百敷の空より匂ふ朝霞民の戸かけて春やたつらむ

30 玉の戸も草の垣ほも隔なき春の光をけさ迎ふらむ

「(ウ)

春の初に萩原貞孫の許より

よそひ出る袖もゆたかに歓喜の尽せぬ春をさそむかふらん

と申遣はしければ かへし

31 雪の中に冬こもりにし草の戸もさすか迎ふる春はのとけき

春の初つ方病に臥てこもりぬけるに 或人の許に申つかはし

ける

32 冬籠る雪の下道かき分て春來にけりとたれかとふへき

句題三十首の中に 春色従東到

33 出る日も霞にけりな天の戸の明る方より春や立らむ

春風春水一時來

34 とけ初る氷のひまの朝風に春をやよする池のさゝ波

風渡る汀の水けさとけて

毎家有春 飛鳥井御会始御題 文化十四年丁丑

35 隔なき春の光にたか里の垣ねの雪も今やとくらむ

「(7・オ)

36 花鳥の色音にもるゝ宿もなしあまねき春の光しられて

春風不選処

37 ふく風もあまねき春の恵をや四方の草木の上に見すらむ

38 朝日さすあつまの山に吹そめて西の海にもぬるむ春かせ

瀧音知春

39 水かみの氷もけさやとけぬらむ春に音そふ山の瀧つ瀬

春風解氷

40 氷るし池の心も今朝よりは春のとけかなる春の風にとくらむ

ヒヒヒヒヒ

春歌の中に

41 春風のふくをたよりに道とめて氷をわくる谷の下みつ

42 春日さす吉備の中山雪きえて細谷川の水まさるなり

霞

43 ゆたかなる春の色とやをしなへて霞の袖も世におほふらむ

「(ウ)

44 春もまたいたりいたらぬ程見えてむらくかすむ雪の遠山

鹿兒島住吉奉納哥に 同し心を

45 吹わくる風の行系はあらはれて跡よりかすむ春の山のは

すさひ草 卷之一

春之部

年内立春

1 ふる年の雪のたかねに出る日も春の光にけさかすむらむ
 2 くれ残る年のをたまき更に又くりかへしてや春のきぬらん

年の内に春立ける日 梅の花の咲るを見て

3 しら雪は猶ふる年の梅かえにけさよりこゝろなからにほふ春のはつ花とさくや此

立春

4 あまてらす影ものとかに明そめて曇りなき世の春はきにけり

5 天の戸の明れは春に立そむる霞や年のへたてなるらん

伊勢太神宮に五十首哥奉りける時 立春日

6 長閑なる天の岩戸の朝日影神代の春や立帰るらむ

立春暁

7 庭鳥の声ものとかに明る□□天の関戸を春やこゆらん

8 ふる年の雪けの雲の立別れ春に明行空そ□□けき

立春風

9 けさよりは雪気の雲も吹たえて霞によはる春の初風

飛鳥井大納言雅光卿より三十首句題賜はりける時 霞にこめ

てといへる事を

10 時しらぬふしの高ねの白雪も霞にこめて春や立らむ

春立ける日 雪のふりければ

「(5・オ)

11 けさも猶かきくらしふる雪の中に道ある御世の春はきにけり

12 年寒き草木か上もけふよりの春に花さくよもの白雪

立春川

13 年なみもけさより春に立帰り川瀬の氷とけそむるこゑ

海辺立春

14 隔なき浪路の春の光をや新島守もけさ仰くらむ

立春鶏

15 ひと年を送り迎へて暁の鳥のはつねも春や告らん

早春霞 尾上貞一家当座

16 けふよりは花の春たつ山のはに霞の色や匂ひそむらむ

17 浪風も静なる世の春見えて四方の海辺やけさ霞むらん

早春山

18 梓弓春きにけりとらし武士の矢野の神山けさ霞かすむらんたなひく

早春海

19 鏡山けさは霞みてはつ春のおもかけうつす鳩の海つら

早春鶯

20 けふよりは花の春とや鶯もたか木の雪に匂ふはつこゑ

初春風

21 吹払ふ雪の木末に花鳥のいろねやいそく春の初かせ

22 いつよりか花に匂はん昨日今日また春寒き雪の山かせ

初春梅

「(6・オ)

「(ウ)

ひ。おほけなくも。飛鳥井大納言雅光卿を。和歌の師と頼み奉り。おほん添けしをねがへる事になんれりけり。あるは折ふしの御題をくだし賜ふて。よみて奉れるもあり。あるは物にふれ時に臨みて。愚かなる心のすさひより。口すさひにいひ出せる言の葉ども。今はふたちゝの数にも余りぬ。みなこれ山賊のいやしう。鳶かづらの「ウ」つたなき物から。其ま、捨ふねの捨をきて。忘貝の忘れ行んも。むげにねんなきわざなるべしとて。みだりなる手すさひに。もしほ草もらさずかき集めて。難波津のよしあしをもわかたず。つい天連歌発句俳諧。或は文のたぐひに至るまで。すへて十の巻となんなりぬ。こはをのづから。ほこらしう人の前にひろむるべき為にあらず。たゞつくゑの上の塵にまじへて。をのれが心ひとつのすさひ草にそなふるものなりかし。

かきよするあまのすさひのかひもあらし
こゝろとくたす浪の藻くつは

天保七年申の冬十二月

すさひ草

目録

卷之一	春之部	四百十四首
卷之二	夏之部	二百三十首
卷之三	秋之部	四百三十六首
卷之四	冬之部	二百五十六首
卷之五	恋之部	三百三十四首
卷之六	雑之部	千六十首
惣合	和歌	二千七百三十首

付録

卷之七	百首之部	三組
卷之八	連歌之部	四十一句
	并発句之部	百九句
卷之九	俳諧歌之部	五十八首
	并発句之部	二十二句
卷之十	文之部	三十二首

大隅垂水のさと

藤原兼愷しるす

「ウ」

「(3・オ)」

「(4・オ)」

「ウ」

翻刻

すさひ草

凡例

本文は、原本を忠実に翻刻することを旨としたが、読解の便をはかるため、次の要領に従った。

- (1) 文字はおおむね現行通用文字に改めた。しかし、当時慣用の烟・寐・汐・鴈・浪・哥などはそのまま用いている。
- (2) 仮名遣いは原本通りであるが、ミ・ハ・セなどの表記も特に片仮名で残すことはせず、平仮名で統一した。
- (3) 和歌には通し番号を付け、合点は傍線で示した。
- (4) 欄外や詞書部分に補入された和歌は（ ）を付けて示した。猶、（ ）の付いているものには、外に欄外に記された感想めいた文がある。
- (5) 訂正には、墨で塗りつぶしたものを、線で消したもの、ヒを付けたもの、抹消記号のないもの等があるが、||| 以上の抹消記号は全て、||| に統一した。猶、訂正された表現はそのまま細字で本文の右側や左側に記した。
- (6) 叙文の。印は原文の通りである。詞書などには、読解の便などの為に、一・二字あげたところがある。又、詞書に和歌が出て来た時は、改行した。
- (7) 虫損のため判読不可能な箇所は□□で示した。
- (8) 丁付は、^(1・オ)のようにして示した。

此すさひ草卷々の中に長点を引たる歌爰かしこ□□れり こは数々の中より折ふしことにかれこれえり出して 飛鳥井雅光卿の御もとにさ、け奉り 卿の御点をくはへ給へりしを其ま、写し置るになん いさ、かも他の人のわさにはあらずと云事を爰にしるす

藤原兼愷^(ウ)

すさひ草序

おほよそ人の世にある。よろづの事わざ多かるにつきて。心に思ふ所なき事あたはず。思ひの内に動く所。かならず詞外にあらはるゝのならひ。高間の鶯の声長く伝はり。住吉の蛙の跡久しうとゞまれるためし。なきにしもあらねば。をのれが心のおもむくまにく。かれこれいひあらはしたらんは。さのみ人の見とがむべきにもあらざめり。されば兼て好む所を。同しうしける^(2・オ) 友だちかたらひあはせて。過つる文化十余り三の年。午の文月の比ほひ。かけまくもかしこき。すべら都の便をうか

「^(1・オ)

「^(ウ)

「^(表紙)

氏子い草巻し一

春い部

年内立春

立春年の言はくは神は出る日もまはれ光よけはくははむむ年
くは残る年の言はくは又くは又くは又くは又くは又くは又くは

年の内はまはれ日梅の花乃言はくは又くは又くは又くは又くは
立春ハれ言はくは梅の花乃言はくは又くは又くは又くは又くは

立春

立春院

何まはれ言はくは又くは又くは又くは又くは又くは又くは

庭鳥の言はくは

天の戸乃明はくは又くは又くは又くは又くは又くは又くは

天の戸乃明はくは

伊勢を神言はくは又くは又くは又くは又くは又くは又くは

立春日

天の岩戸乃言はくは又くは又くは又くは又くは又くは又くは

立春日

天の岩戸乃言はくは又くは又くは又くは又くは又くは又くは

頂上元子序

於保よおと人の世よあゆむるにの事よまゝ
 ぶみはあてふに思よ所なきに中あつた事
 思いの内よあつふの事よび河和あつた事
 の形よい。高間の宮あつた事よはつた事
 越え跡ようらむる事よあつた事
 ちふ跡よの事よあつた事よあつた事
 いの事よあつた事よあつた事よあつた事
 あつた事よあつた事よあつた事よあつた事

垂水の文学（四）

『すさひ草』（垂水市教育委員会蔵）

—南九州の国文学関係資料（二十二）—

橋口晋作
望月正道
木戸裕子

今回、ここに翻刻して紹介しようとしているものは、垂水市教育委員会が所蔵する、垂水の歌人伊集院兼愷の歌集『すさひ草』（上巻）である。同本の書誌は、

半紙本の写本一冊（二冊本の上巻と見られる）。縦二三・一糎×横一六・五糎。表紙は新装。一丁のウラから九十七丁のウラまで墨付き（虫損の為、裏打ちされている）。袋綴。歌は一行書きで、詞書は二字から三字下げ。みせ消ち、訂正などが相当にある。又、歌には合点が付けられている（写真 参照）。一面は原則として十三行。二丁の自序、一丁の目録が初めに付いている。歌集本文は巻ごとに改訂されている。

の通りである。作者兼愷については、『松操和歌集』^{（注一）}の「作者略伝」に天明六（一七八六）〜安政二（一八五五）。八兵衛（筆者注 見出

しには吉左衛門が出ている）。兼貞の次の代の人。垂水島津家々臣。文政三年家老となる。文武両道に達し、武芸は邑中の士に教授した。和歌は飛鳥井雅光に学んで、家集『すさび草』十七巻を残し、天保六年には垂水の第二歌集『波の藻屑』を編む。華道・茶道に通じ、『垂水奇話』の著もある。行年七十。法号、潜竜。（垂水市誌）とある。兼愷の和歌は、『松操和歌集』に六首、『浪の下草』に百三十首、『浪の藻屑』に百十五首が採られている。垂水歌壇の代表者の一人であった。

本歌集には、既に本学元教授福井迪子博士が指摘されているように、^{（注二）}『松操和歌集』の編者川畑篤実家での歌会に出詠した和歌が収められている。これで見ると、川畑篤実は垂水歌壇の人ではないが、和歌を通して兼愷と交流のあった人であった。下巻があればもっと川畑篤実についての情報が記されていたかも知れないと、残念に思われる。

猶、垂水歌壇のことは福井先生が鋭意、調査・研究されていた。共同作業による翻刻が終わった後、福井先生の翻刻された原稿が垂水市教育委員会にあることを知り、参照させて頂いた。一筆その経緯を記して、福井先生の学恩に感謝し、お許しを乞うことにした。

（注一）田中道雄、福井迪子、橋口晋作編（昭和五十五年三月）

（注二）『垂水の文学（二）』『浪の下草』（垂水市教育委員会蔵）——南九州の国文学関係資料（十七）——『研究年報』昭和六十二年三月

（橋口晋作 記）